

37

特 220

37

# 針指道弓子女

著會興振育体子女



行發店書黒目京東



# 始



時220  
37



東京女子高等師範學校  
女子體育振興會著

女子弓道指針

東京目黒書店發兌





東京女子高等師範學校  
附屬高等女學校弓道場

## 序

一、本書は女子の中等學校に於いて弓道を課せんとする際の指針  
たむが爲めに編纂したもので、簡略ではあるが平易を主とし、要領  
を把握することに努めた。尙女子の生理的方面並に禮法に關して  
は特に意を用ひた。

二、本書の原稿は東京女子高等師範學校にて弓道を教授せられる  
碧海康温氏の執筆にかゝる。本書はこの原稿を基礎として、左の諸  
氏に時々御會合を請ひ、審議を重ねて決定したものである。茲に之  
を記して厚く謝意を表する。

泉橋慈善病院婦人科長

醫學博士 岩田正道氏

成器寮醫館副院長

醫學博士 村尾圭介氏

序

序  
 東京府立第七高等女學校教諭  
 東京女子高等師範學校長  
 東京女子高等師範學校教授  
 東京女子高等師範學校教授  
 東京女子高等師範學校教授  
 東京女子高等師範學校講師  
 東京女子高等師範學校講師

二  
 高橋正子氏  
 下村壽一氏  
 中澤伊與吉氏  
 佐々木等氏  
 林太郎氏  
 岡ハツノ氏  
 碧海康溫氏

昭和十三年七月

女子體育振興會

女子弓道指針 目次

第一章 女子と弓道……………一

第二章 射法……………一四

第三章 射禮……………三二

第四章 練習の方法……………三八

    (甲) 一般の練習……………三八

    (乙) 團體の練習……………四四

    (丙) 實施上の注意……………五二

第五章 弓道の競技……………五四

目次

第六章 弓具及び服装……………五八  
第七章 射場……………六八

## 第一章 女子と弓道

我が國の女子と弓道とは非常に深い關係がある。古事記に  
背そびらには千入ちのりの鞆ゆきを負ひ、五百入いほのりの鞆ゆきを附け、亦臂たぢむきには稜威いっの竹鞆たかも  
を取り佩おばして、弓腹ゆはら振り立てて、堅庭かたはは向股むかももに踏ふみなづみ

とあり、天照大神が素戔鳴尊に異心があるものと思召し、弓矢を以つて威嚇し給うた事を敘してある。これを以つて見ると、我が國では弓道の始祖は女性で在らせられたことになる。しかし、其の後、女子と弓道とが割合に縁が遠かつたのは主として服装の關係であつたらしい。近時、女學生は殆んど全部が洋服になつたため、行射するのに便利であるから、女學生の弓道が自然盛になつて來た。その上、昭和十一年六月文部省令により女子中等學校に於て弓道が正課とし

て認められるやうになつたから今後は益々盛になるであらう。

弓道はその動作が過激でなく且各人の力相應の強さの弓を自由に選擇することが出来ると共に、相手といふものの必要がなく、獨りで練習することが出来るので、女子の運動として最も適當である。しかも弓道は體育的によいばかりでなく女子の美德として缺くべからざる儀禮を重んじ、動作が優美、典雅であるから、殊に女子には好適である。

今、少しく弓道の效果について説明を加へて見よう。

弓道は本質的に他の所謂運動競技とは大に趣を異にしてゐるから、従つて弓道の效果は、亦他のものには見ることの出来ない特色を含んでゐるのである。是等を詳細に記述することは決して容易な業ではないから、茲には只その要點のみに就き、精神的方面と身體的

方面とに分けて簡単に説明してみよう。

#### 精神的効果

弓道が他の運動競技に比して優つてゐる點は種々あるが、就中精神的の要素が多量に含まれてゐることは、弓道の最大特色である。弓道は「心の道」であると言つても敢て過言ではない。

先づ的に向ふには極めて沈着且冷靜でなくてはならぬ。矢を離すには、その上に果斷な精神がなければならぬ。更に是等の精神が發現するためには、是非とも、その基礎として、完全な精神統一を必要とする。

精神統一、沈着、冷靜、果斷等の要素が具備されて、はじめて正しい射が行はれ得るのであるから、是等の精神的要素は、實に射の第一義的要素と言はなければなるまい。従つて射の練習は、とりもなほさず

是等の精神作業の鍛錬であり、射の効果は是等の精神作業の完成であると言ふことが出来る。古人が「射以觀德」と喝破したのも誠に故ある哉である。

精神修養を行ふには自責、内省といふことは甚だ肝要なことであるが、弓道に於ては本質的に自責、内省の機會が甚だ多い。清淨嚴肅な<sup>まじ</sup>向つて射を行ふ際、中<sup>あた</sup>るも外<sup>はず</sup>れるも、上出来も不出来も皆總て自分の力であり、自分の術であることが明らかに認識される。自分の失敗を他人に轉嫁することは絶対に出来ない。只管に自責し、内省して益々技を磨くの他はない。

更に競技としての弓道に就いて見ると、茲にも一の特色がある。「相手を尊敬せよ、誤つた對敵行爲に陥るな」とは總ての運動競技に於て常に力説される所であるが、白熱した競技に於ては往々誤つた對

敵行爲に陥ることもある。しかし、弓道の競技ではこの弊害は殆んど絶無といつてよい。弓道の競技は競技者同志が直接に技を競ふのでなく、<sup>まじ</sup>的といふ靜物に對して、各人が射を行つて、技を競ふことになるから、本質的に對敵精神といふものが他の運動競技とは大に違ふ。その上、弓道は主として靜的の運動であるから、興奮して白熱するといふ事もない。是等の理由から、弓道の競技は自ら、公明に技を競ふことになり、誤つた對敵行爲に陥ることが無い。

尙、弓道では常に禮に重きを置き、起居動作の優美、典雅を尊んでゐる。これは特に日本の女子の美德の一であつて、弓道を練習すれば、自然にこの美德が涵養されることともなる。近來、女子スポーツの普及に伴ひ、日本女子本來の美德とスポーツの形式との間に矛盾を來すやうな事が往々問題になつて論議されるやうだが、女子の弓道



は確かにこの問題解決の鍵となり得るものであらう。

### 身體的效果

弓道の身體に及ぼす效果に就いては、これまで一般には餘り理解されてゐない。むしろ弓道は身體上には極めて效果の乏しいものと考へられてゐるらしい。しかし、事實は決してさうではなく、顯著なる效果のあるものである。

今茲にそれ等の效果について述べるに先立ち、まづ從來何故に弓道は身體的效果の乏しいものと誤解されたかの原因を考察してみよう。さうすれば同時に弓道の效果が奈邊に存するか、延いてはその眞價も自ら明らかになるであらう。

身體の諸器官はよく用ひれば用ひるほどよく發達するといふ性質を具へて居る。而して總ての身體的訓練は此の事實に立脚して

ゐることは言ふまでもない。所が往々此の事實を誤解して、身體は用ひれば用ひるだけに發達するのだから、激しく用ひる程その効果も一層大きくなるかの如くに思つて、體育運動も激しいものでなければ效果が無いかのやうに考へ、従つて弓道の如く、むしろ靜的な運動は、身體的效果の乏しいものと速斷してしまふものもある。これは極めて淺薄な素人考へである。

嬰兒は乳を飲んで成長する。然し乍ら乳を多く飲ませれば飲ませるだけ一層大きく成長するといふわけのものではない。少な過ぎず、多過ぎず、丁度適量の乳を飲む時、最もよく成長するのである。身體運動の效果も同様であつて、適度の運動が最大の效果を得るのであつて、決して運動の激しさが效果の量と比例するわけのものではない。むしろ激しきに失した運動は身體に弊害を及ぼすもので

ある。

かく考へると、激しい運動のみを賞用して、弓道の如きは効果の乏しいものと断定してゐるのは甚だしい誤解であることが知られよう。實に體育運動の要諦は最も適量の運動を爲すといふ事にある。而して、身體の力量は各人夫々に異つて居るのであるから、適度の運動量といふものも亦夫々異つて居るべきである。激しい運動の適する人もあれば穏やかな運動の適する人もある。此の見地から激しい運動でなければ効果なしとする考へ方の誤謬であること、一面、弓道が身體に對して顯著な効果を及ぼし得るものであることが、明らかに理解されるのである。

その上、弓道に於ては外見上、表現される運動は極めて靜的で且つ小ではあるが、その内的努力を考へて見るとその運動量は決して僅

少ななものではない。例へば一つの筋肉が働く場合を考へて見ると、同じ量の力が働いてゐても、それが運動として外部に表現される場合と、外部には少しも表はれない内部的努力となる場合とがある。即ち動的な作業と靜的な作業とがある。而して動的たると靜的たるとを問はず、その場合に用ひられてゐる力の量には變りはない。

要するに、從來弓道が身體上には効果の乏しいものと考へられてゐたのは、弓道そのものの理解に乏しい人の皮相の見解であつて、實際に於ては他の多くの體育運動に比して決して劣るものではないのみならず、むしろ次に述べる如く獨特の長所をさへ具備してゐる極めて好適なものなのである。

さて弓道の體育的效果の主なものとして、(一)姿勢を正しく保つ事、(二)伸筋の運動が多く行はれる事、(三)全身に均等な作業が行はれる

事、(四) 充分な呼吸運動が行はれる事などが擧げられる。

(一) 姿勢を正しくする事は、健康保全のための最も手近で且最も重要な基本的事項であつて、すべての體育運動に於ても此の事が基礎とされてゐる。しかし單に姿勢を正しくするといふのみの努力では、興味の少い事柄であるために、如何にそれが身體に好影響を與へるものであつても、ややともすればその實行が閑却され勝ちになるものである。姿勢を正すための體操は種々あるが、強制的に行はせられる以外は、進んで實行する人が少く、従つて効果もあまり擧つてゐないのはこれがためである。然るに弓道にあつては、決して無味乾燥な強制からではなく、射といふ運動の本來の性質からして極めて自然に姿勢を正しくするための努力をさせるやうに成立つてゐる。いやしくも射を正しく且つ巧みに行はうとするならば、是非と

も姿勢を正しくしなければならぬ。姿勢を正しくしないと決して良い射は行ひ得ない。従つて弓道では單に正しい射を行ひ、正しく矢を的的中せしめようと努力すれば、それがとりもなほさず正しい姿勢を得るための方法となるわけである。即ち姿勢を正すといふ、極めて重要ではあるが實行の閑却され易い事柄が、弓道では津津たる興味の内に極めて自然に行はれ得るのである。

(二) 弓道では伸筋の運動が多く行はれることも顯著な効果の一つである。我々の日常生活に於ては、屈筋を使用する機會は甚だ多いが、伸筋を使用する場合は極めて少い。従つて全身筋肉をして平等な發達を遂げしめ、健全なる身體を作るためには、是非とも伸筋の鍛錬に留意しなければならぬ。弓道に於ける射の運動では大いに伸筋を用ひるから、此の意味に於て甚だ好適な鍛錬方法といふべき

である。

(三) 弓道では左右の兩半身が異つた作業をするから、不平等な發達を來たすであらうと憂慮する人があるかもしれないが、これは射の運動を理解して居ない人の淺見であつて、射の要領を理解すれば自ら會得されるやうに、射に際して身體のなす作業を精しく觀察すれば實際は極めて均等な作業であつて、従つて身體の均等な發達が期し得られるのである。

(四) 平素自然に行つてゐる呼吸は比較的一般に淺いので、肺の一部には空氣の交換の不完全な部分がある。殊に女子にあつては體質及服裝等の關係からして此の缺陷が起り易い。そのため自ら肺の機能も不十分となり、病氣に冒される機會も増すわけである。従つて時には殊更に大きな呼吸運動即ち深呼吸をして呼吸器官の鍛鍊

をする必要があるが、單なる深呼吸は無味乾燥なものであるがため、効果は認めつつも兎角實行を怠り勝ちのものである。然るに弓道にあつては、射の運動に伴つて無意識の内に自ら十分な深呼吸が行はれ得るのである。

要するに弓道は女子の體育運動として心身兩方面より見て極めて適切なものといひ得る。

### 第一章 射法

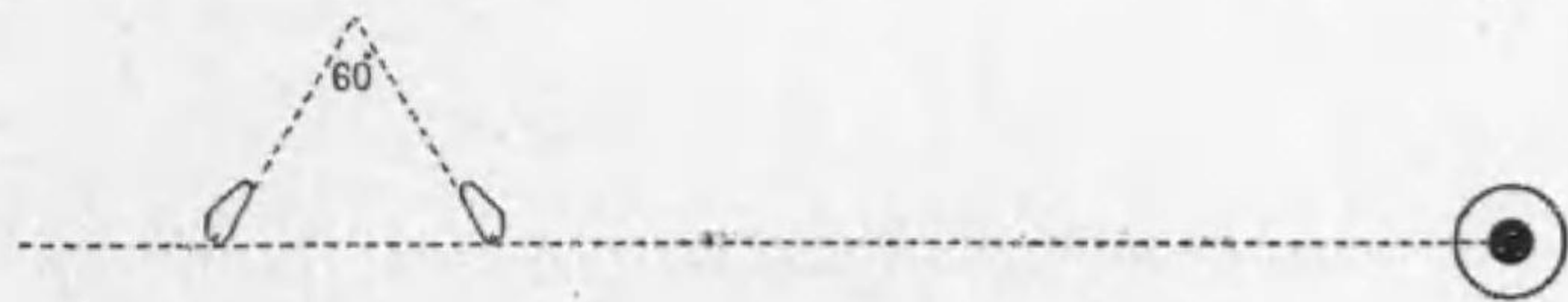
射法は通例足踏、胴造、弓構、打起引取、會離の七つに分  
かち、これを七道と呼んでゐる。

#### 一 足踏



(造胴・踏足) 圖一第

先づ、正しき姿勢  
をとることが必要  
である。正しき姿  
勢をとるには正し  
き足踏をしなけれ  
ばならぬ。正しき  
足踏をするには、第



(方仕の踏足) 圖二第

二圖の如く、的の中心と左足の拇指の先と右足の拇指の先とがほぼ  
一直線上にあるやうに踏みつけるのである。而して左右兩足の間  
隔は身長の半分よりやや狭く、兩足のなす角度はほぼ六十度とする。

#### 二 胴造

正しき足踏をすると同時に、上體をしつかりと落ちつけ、上體の重  
みを全部兩足に托し、左右の肩を落とし、靜かなゆるやかな氣持にな  
る。この時、上體は「氣をつけ」の姿勢よりやや前がかりとなる。胴造  
の際は身體全體は皆まつすぐにする。曲り又はねぢれなどがある  
と、後で種々の故障が出て困るものである。足踏、胴造は射の基礎で  
あるから十分注意して決して決しておろそかにしてはならぬ。

又、足踏と胴造とは、もともと分離した二つの動作ではない。先づ  
足踏をして然る後、胴造をするものではなく、左右の足で足踏をする



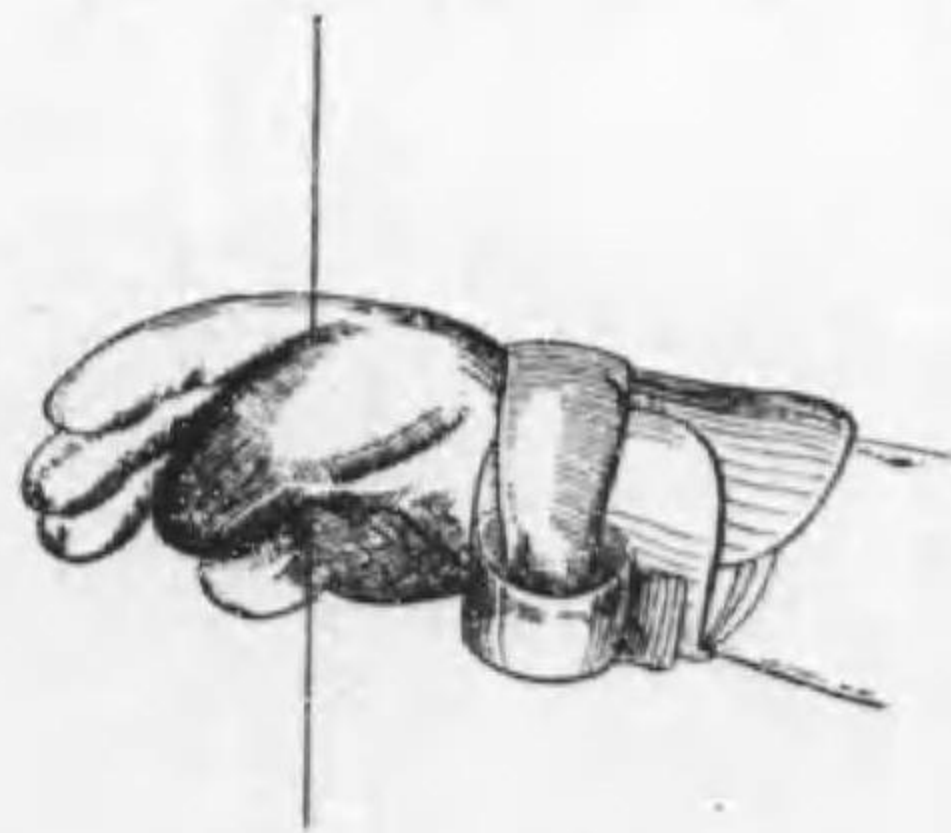
第三圖 (一の構弓)

と共に上體では胴造をするのであつて、實は一つの連続した動作に外ならぬ。

三 弓構

弓の本頭を左の膝頭の上で支へ、左手で弓を前面に持ち來る。この時、弦は右に

向くやうにして、こゝで矢を番へる。筈のかけ合せの高さは握り皮の直上、矢すり籐の最下部に矢が當るやうに保ち、筈が弦と直角になる點より少しく高くするを適當とする。そして弓を膝頭に据ゑたまま、右の手を軽く下腹部にあ



第四圖 (懸取)

て十分に氣息をととのへ、然る後徐ろに取懸にかかる。

取懸をするには顔を正面に復し、こゝでは三つ弾について述べる、

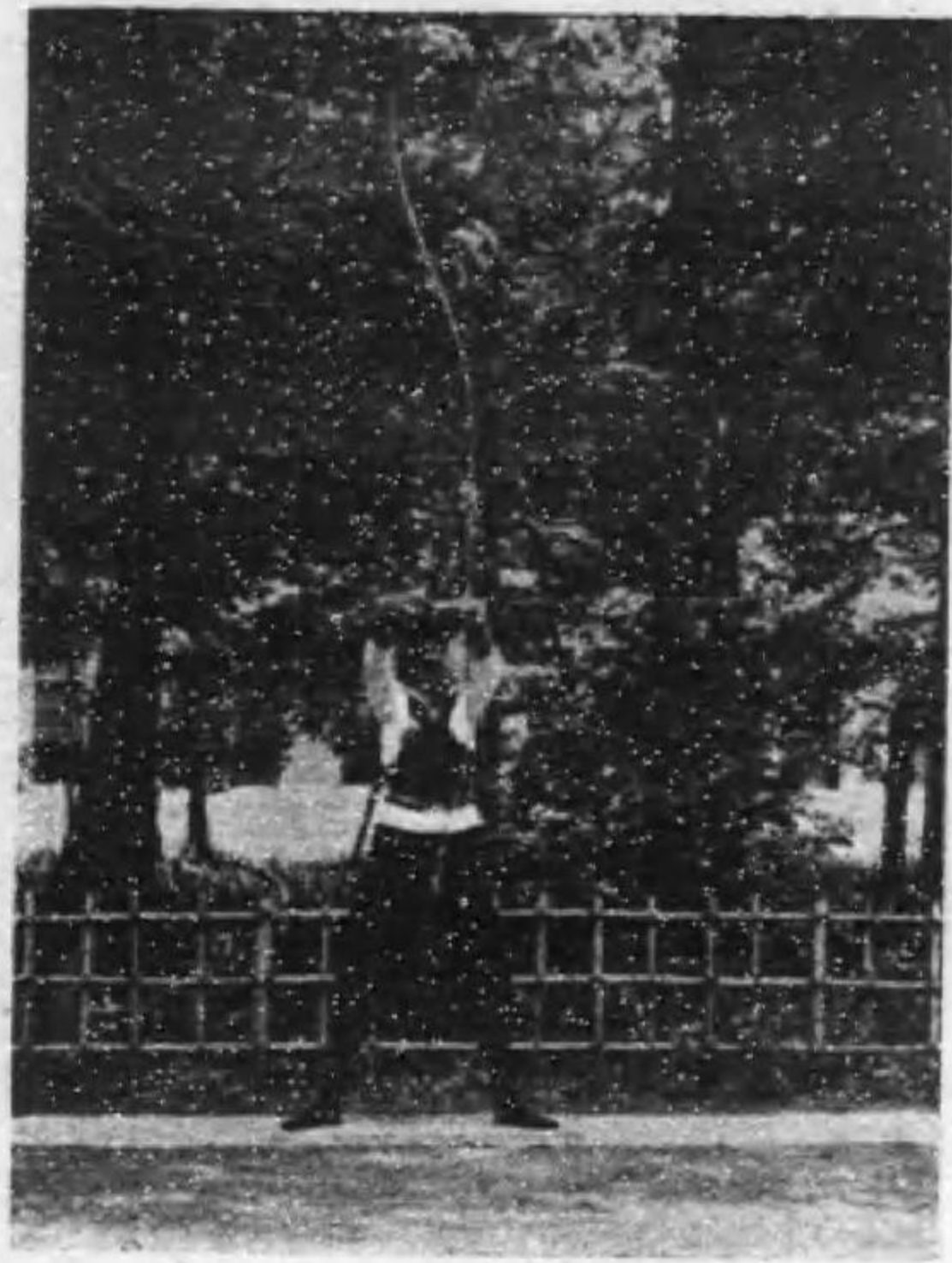


第五圖 (二の構弓)

右手の拳に注目し、右手の拇指の根元(堅帽子の弾ならば弦枕)に弾かをけ、弾の拇指の頭のところ、中指(四つ弾の場合は無名指)の第三關節の邊を押しつけ、人差指は中指の上に軽く重ね置き、徐ろに上方に摺り上げ、外側から筈と篋とを人差指の根元で、靜かに支へる。而して左右の手首と肘とを柔らかに少し曲げ、かるく物を抱く氣持になるのがよい。

四 打起

弓構が出来たら、顔を再び的に向き、左右兩拳を同時に上げて、静かに打起を始めるのである。



第六圖 (打起)

打起をするには、身體をしつかりと落ち付け、左右兩拳は水平に保ちつつ高く上げ、しかも上方へ釣り上がるやうな氣持なく、左右の肩を十分落とす。身體の重みが全部兩足にかかるやうにして決して浮かしてはならぬ。左右の膝蓋骨は上の方に引き上げるやうに力を入れて、ふくらはぎを張り、兩足の裏はびたりと地面に密着するやうにする。腹部は下の方に押し沈めるやうにして、いはゆる

臍下丹田に力を籠め、身體をやや前がかりにする。

打起の際は、身體、精神共にゆつたりと伸びくした氣持で居らねばならぬ。ここで要もないのに無闇と力を入れてあまり緊張し過ぎると、却つて引取以後の動作にゆとりがなくなつてしまふ。

左右の肩を落とすといつたが、左肩は兎角上り勝ちのものであるから特にそれを落とす事に注意すべきである。左肩を落とすことは射には必要缺くべからざる根本條件の一つである。左肩が上つて居つては、左手に力がいらぬから、左手の働きが弱いので、弓を十分に押すことが出来ない。

丹田に力を籠める事も亦射の根本條件の一つである。腹部に力がいらぬと、重心が上の方にあるので、身體全體が落ち付かず、ふらふらするやうになる。ふらくでは弓は引けない。但し、腹部に力

を入れるといつてもいきむのではない。只腹部の力が抜けないうにするのである。

五 引取 ひきとり 附 ちゅうりき及び手の内

引取はおのづから二つの動作に分たれる。初めの動作は中力と呼ばれて、本當の引取の準備と見るべきものである。



第七圖 (力中)

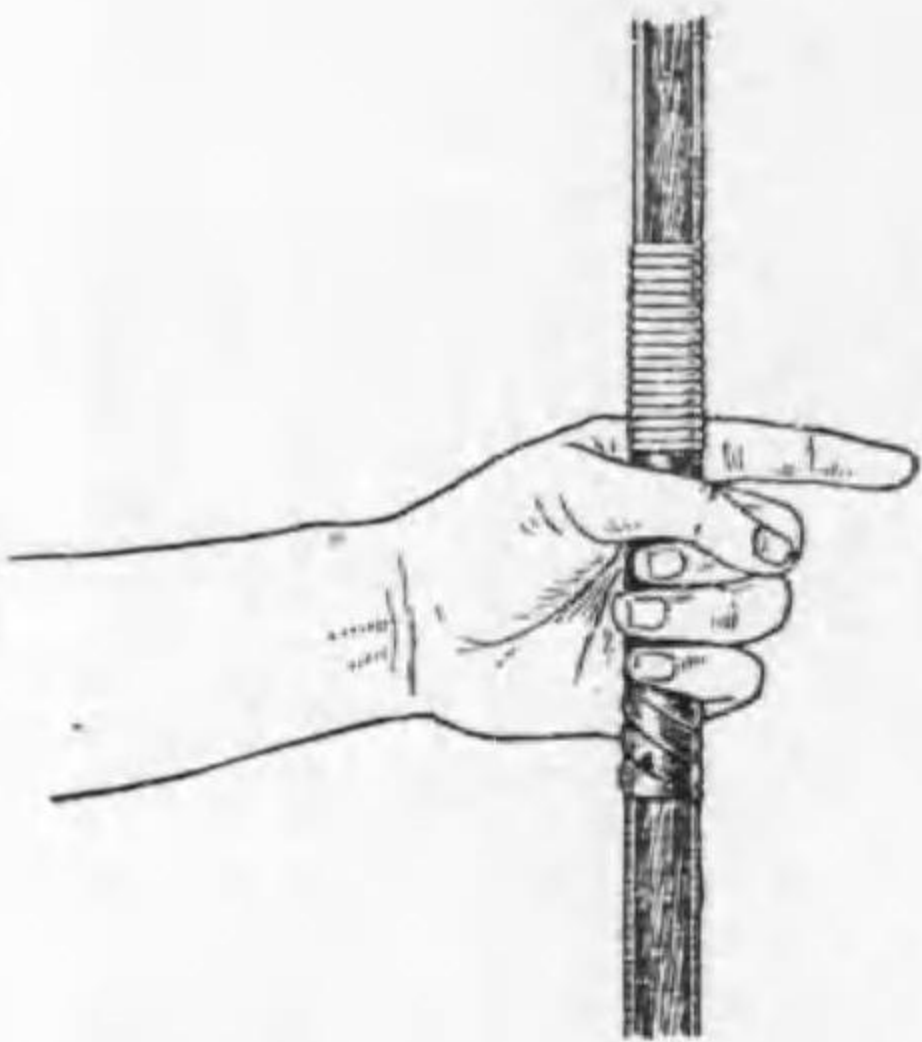
へるだけにする。この時右の肘ひぢは下からぬやうに少しく張り、左右

打起の姿勢から中力に移るには、兩方の拳を左右に移動せしめ、左手がほぼ真直まっすくになるまで延ばし、右手は只左手に引かれて上體の姿勢が歪ゆがまぬやうに弦をひか

の拳はほぼ水平にして額の高さに保つやうにする。

中力ちゅうりきの時は専ら左手を働かせるのであるから、ここで弓の握り方

について述べる必要がある。



第八圖 (内の手)

弓道では左手で弓を握ることを「手の内」と呼んでゐる。手の内が正しくないと、弓の威力を十分發揮させることが出来ないのである。

弓を握るには主として拇指と中指とを用ひる。中指の上に拇指を少しく重ねて中指の爪が少しかくれるやうにし、兩指が相離れぬやうにする。而して人差指は力を入れず、自然に伸ばして置く。無名指と小指とは中指の下の方に揃そろへて



置く。この二つの指には特に力を入れるには及ばぬ。又中指、無名指、小指の三指は隙間の出来ぬやうに密接せしめる。

中指と拇指とでしつかり弓を握り、拇指と人差指との股の中央でしつかりと弓を押すのである。この時、拇指の根元から第一關節までの内側の骨で弓の右側を強く押し、拇指の爪先は自然のままですく下方に向はしめる。中指はその末節で弓の右側を強くしめつけ、爪先に十分力を入れる。

そして掌は中指の付け根の邊に十分力を入れて弓を握り、掌心にあまり弓が當らぬやうにする。俗に掌の中に卵がはいるやうに握れといふのはこの事をよく説明して居るものである。

この様にして弓を握つた形は所謂中押なかおしと呼ばれるものであつて、正しい手の内である。

中力ちゆうりき以後の引取が主なる引取である。いよ／＼この引取にかかるとは、左手の指は前記の如き要領にて弓をしめつけ、拇指と人差指との股でしつかりと弓を押しながら左手の肘ひじを内轉ないてんせしめて尺骨しゃくこつと橈骨りやうこつとが上下の位置になるやうにする。左の肩はしつかりと落としたまま、力を抜かぬやうにせねばならぬ。引取の完了に近づくと共に、弓はやや前方に伏さるやうにする。さうすると、弦は右の胸から斜めに左下へびつたりとつくやうになる。

右手は主として肘ひじの力で弦をひくのであつて、決して手首の力で引いてはならぬ。拇指の關節はまげずに伸ばして、爪ゆがけが蹠ゆがけの裏に當るやうにする。弦を引くには、中力の時の位置から右の拳が空間に弧を描くやうに斜めに右下へ引くのであつて、直線的に真直まっすじにひくのではない。又、弦は窮屈きうくつにならぬ限り身體に近く引くべきもので

ある。

引取で最も注意すべきことは身體全體の力の事である。實に引取は左右の手のみでするものではなく、身體全體殊に胸と背との力が加つて始めて完全なものとなるのである。

矢は常に水平の位置を保ちながら引取らるべきものである。引取の完了すると共に、矢の位置はほぼ上唇の邊にあるべきもので、又筥はびつたりと頬へ付いて居らねばならぬ。

引取が完了した時の右肘は少しく下がりが氣味がよろしい。又肘は少しく後方に來る程度まで引かなければならぬ。さうすると胸は弓と弦との間に割り込むやうになる。

引取が完了した時の右手の拇指は前述の如く關節をまげずに伸ばし、その爪先の上に靜かに無名指の腹がかかるやうにする。更に

無名指の上に中指と人差指とが軽く重なるやうになるべきで、この二つの指は決して拇指に觸れないやうにせねばならぬ。小指は軽くまげて置くべきものである。

中力を終つて眞の引取にかゝつてから會離までは、どうしても一呼吸でやらなければならぬ。

引取は餘り早くやらぬのがよろしい。さりとて餘りゆる／＼としてゐては業に生氣がなくなる。

一體射の動作はゆつくりとなだらかでなければならぬ。又一つの動作から次の動作に移るのにも決して際立つて目立つやうにしてはならぬ。やはりなだらかに自然に移りゆかねばならぬ。

### 六 會

引取が完了された所が即ち會である。これまで足踏、胴造、弓構、打

起引取の諸過程を順次に踏んで来たのは、完全な會くわいに到達せんがためである。會くわいは離はなれと共に弓道では重大な位置を占めてゐるもので、

正しき會くわいがなくては正しき離はなれは出来ぬものである。

引取が完了されて未だ離れざるところが會くわいである。であるから會くわいは一見静止の状態と思はれるものであるが、この静止は終局の静止でなく、次に來るべき離はなれの準備でなけ



(會) 圖九第

ればならぬ。

左手はその拇指と人差指との股でしつかり弓を押し、中指と拇指とで弓をしめつけ、左の肩へ力を籠めて左腕を十分伸ばし、右の拳は

手首に力を入れぬやうにし、肘ひじをしつかりとしめつけ、やや後へ廻し、右肩に力を入れる。

これらの事項は會くわいに於て、初めてするのではなく、引取の時の動作の繼續であるべき事は勿論である。右手の拇指はゆがけの中なかで十分伸ばし、爪にて強く無名指の腹を押しあげる氣持にする。さうすると只無名指と拇指とを分離せしめるだけで、拇指はその惰力だうりきで強く跳はねられるので、離はなれが一層強く且軽くなるのである。

そして胸は決して縮むことなく十分開いて、弓と弦との間に割り込むやうにする。顔は正しくまつの方かたを向いて居ることは前に述べたとほりである。即ち仰向おほむかいても悪い、うつむいても悪い、右に傾いても左に傾いてもよろしくない。首はのびやかにして決して凝こつてはいけない。

弓のねらひは主として右の眼を用ひ、左拳と弓の左側とを見通して定むべきものである。右の眼で弓の左側からねらつて、初めて矢は真直に的に向ふことになる。左の眼は使ふと、そのために狂ひが生じて、矢の方向が變つてしまふから左の眼を使つてはいけない。さりとして左の眼をつぶつてしまつては、遠近を見定めることが不



第十圖 (ひらね)

自由にもなるし、威嚴をも傷ふからよろしくない。左の眼を同じやうに開きながら主として右の眼の視力のみを使ふことは、少し練習すればちきに出來るものである。拳の高さは距離の遠近、弓の強弱等によつて異なるものである。

七 離

會の状態にありては、弓と弦とは互に引きしぼられて位置のエネルギーを十分に貯へてゐる。このエネルギーを全部一本の矢に移す動作が離である。



第十圖 (離)

このエネルギーを全部矢に移すには、いかなる時が最も適當であるか。會にはいつて静止の状態を續けてゐると、弓の力が左右の拳に作用して來る。この時がそれである。しかし、ただこればかりではいけない。この時丁度、身體、精神、共に統一して、弓のさそひと相呼應して來れば、これが正に離の時である。

離をなすには右手の拇指を跳ねて、無名指と分離せしめるのである。

る。これと共に左手の拇指をしめ、殊にその爪先には力を入れて、中指へ押しかける。右手は拇指を跳ねると共に右腕は肘を中心として開くのである。開いた肘の角度は約百度位が適當であらう(但し初心者は右腕がほぼ一直線になる程度まで開かせて練習するがよい)。胸は十分開くやうにはたらかせるため左腕はやや後方に来るやうになり、その結果として弓の右の方の的が見えるやうにならなければならぬ。この時左腕も右腕も甚だしく上がり下がりがあつてはならぬ。

射の動作はすべて静かに優美にやらなければならぬことは前に述べた通りであるが、離はなれのみは例外で、活潑に敏捷にやらねばならぬ。離はなれの動作をする時、ややもすると身體全體の姿勢が崩れることがあるが、これはよろしくない。動かざること山の如しと言ふ姿勢で居

らねばならぬ。それにはどうしも丹田の力が必要である。

離はなれは又軽くやらねばならぬ。力強く且軽くといふことはいはゆるさやえと云ふもので、日本固有の武術に共通してゐる。これは一寸筆紙には盡せぬ。各人、技を勵み自ら會得すべきものである。

離れて後は眼は常に飛ぶ矢の後を追ひ、矢の落ちつくところをしっかりと見極めなければならぬ。この際離はなれの姿勢をくづさず、威儀を落とさぬやうに心掛けねばならぬ。これを弓道では殘身ざんしん(殘心)といつてゐる。

第三章 射禮

左手に弓、右手に矢一手を持ち、手腰の姿勢

で、本座に出で

(第十二圖) 的に

正しく面して

立ち、軽く一禮

して、左足から

前進、第十三圖

の如く射位よ

り一步手前で止まり、左足を前方に出して右  
に向き、右足を左足につけ、第十四圖の如く正



(座本) 圖二十第



(る至に位射てし進前りよ座本) 圖三十第



(位射) 圖四十第

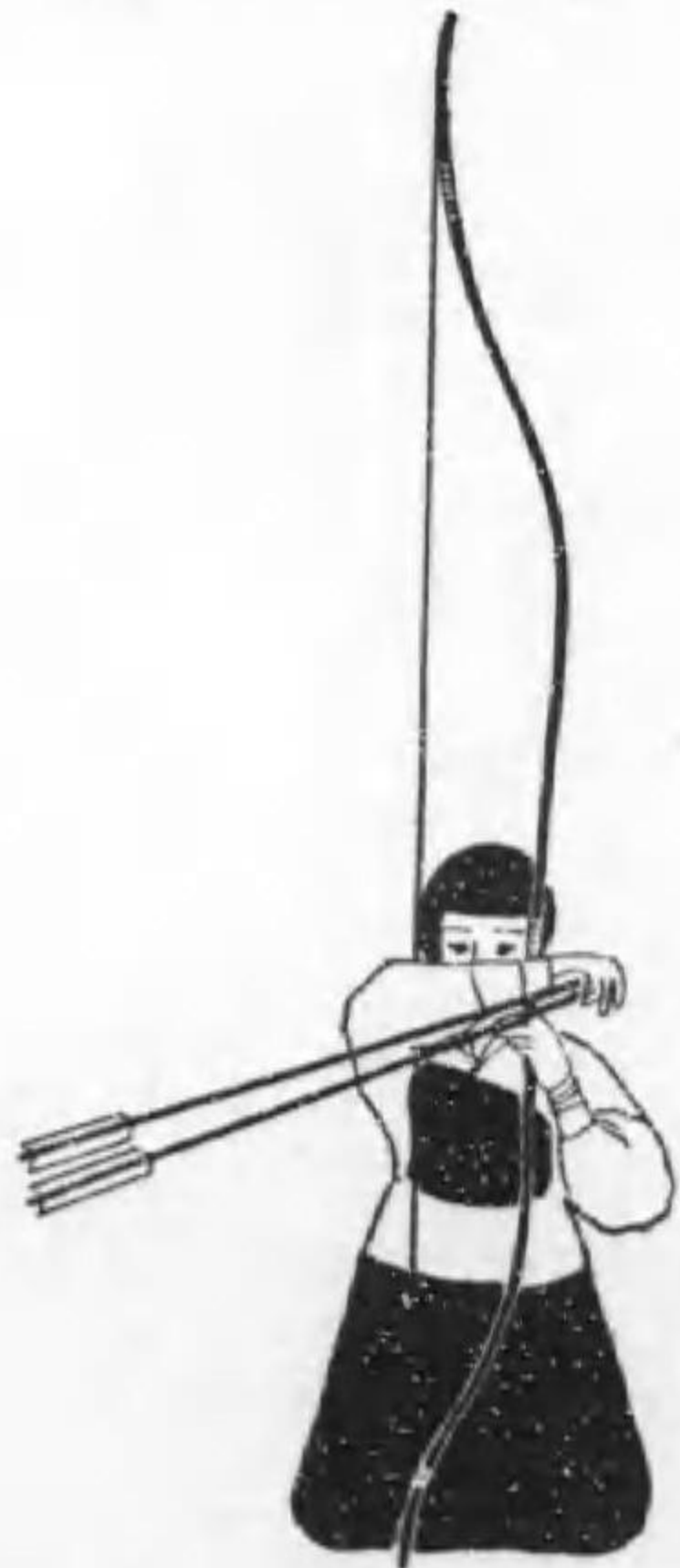
右方に向けて矢羽を検し、甲矢を左手の拇指と人差指で支へて、箭を  
番へ(第十五圖、第十六圖、第十七圖) 乙矢は第十八圖の如く、箭を左方に  
向け、甲矢に並行させて、その下に持ち添へ、甲矢の箭の下へ乙矢の射  
付の節が来るやうにする。

これを「かすみ」に打つといふ。

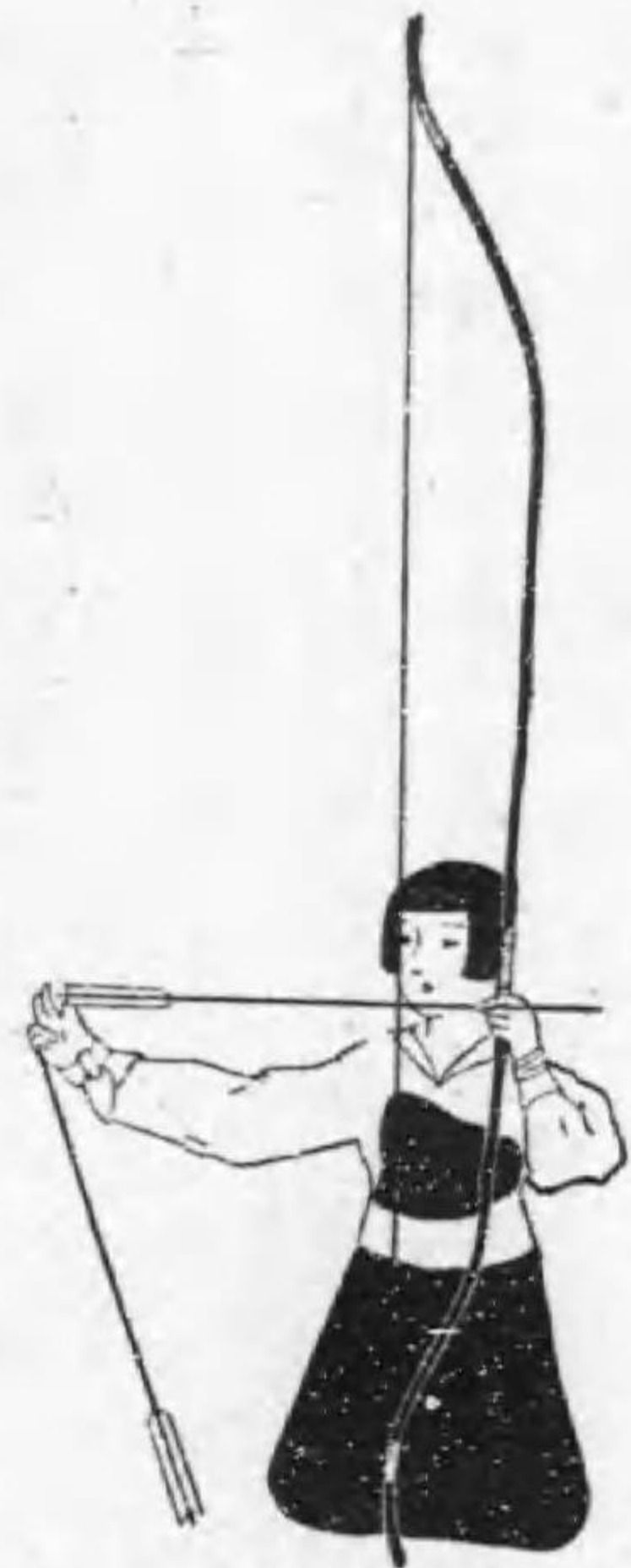
而して、右手の拇指、人差指、中

指で甲矢の箭を下方から支

へて、左足から立ち上り、足踏



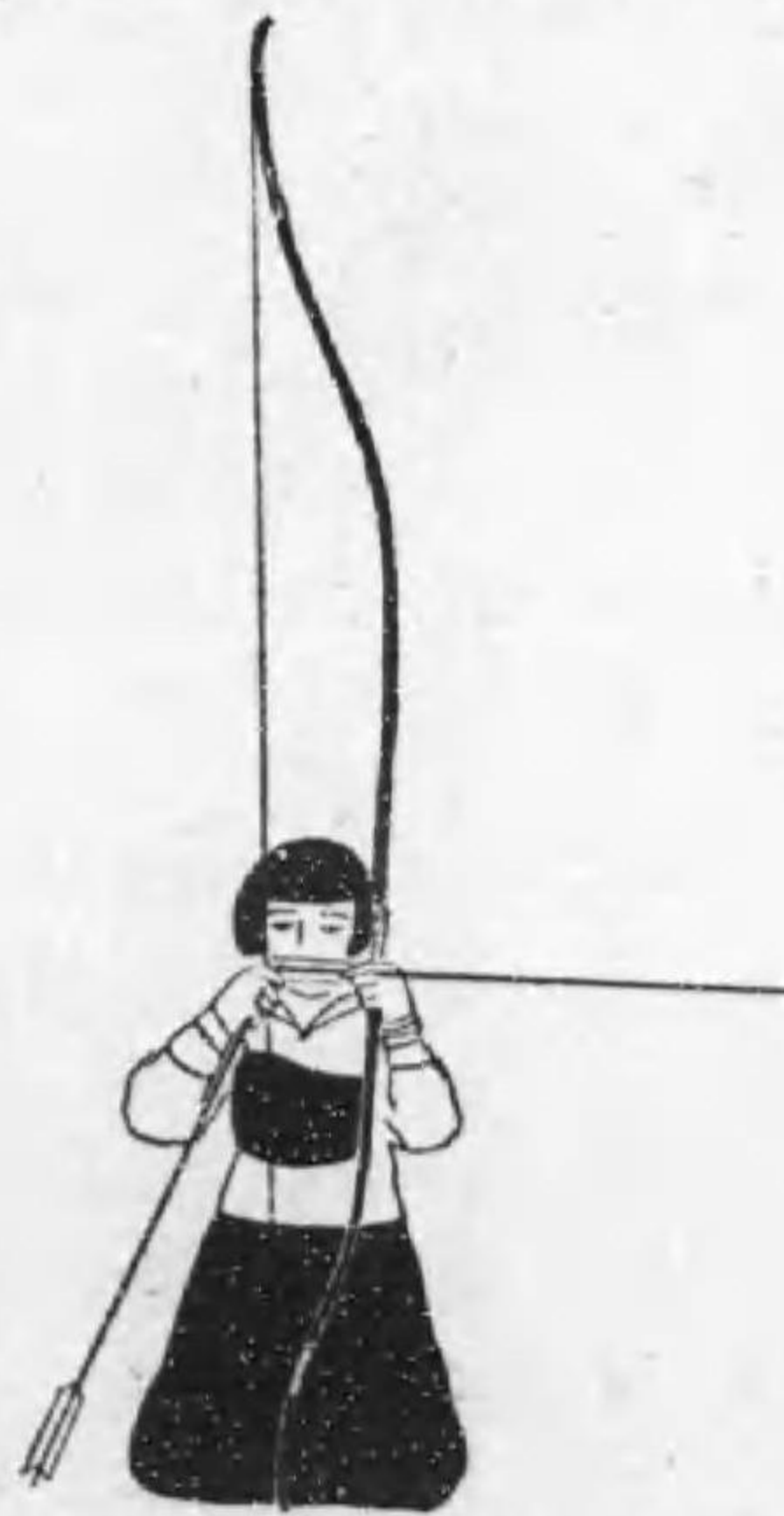
(ふ番を矢甲) 圖五十第



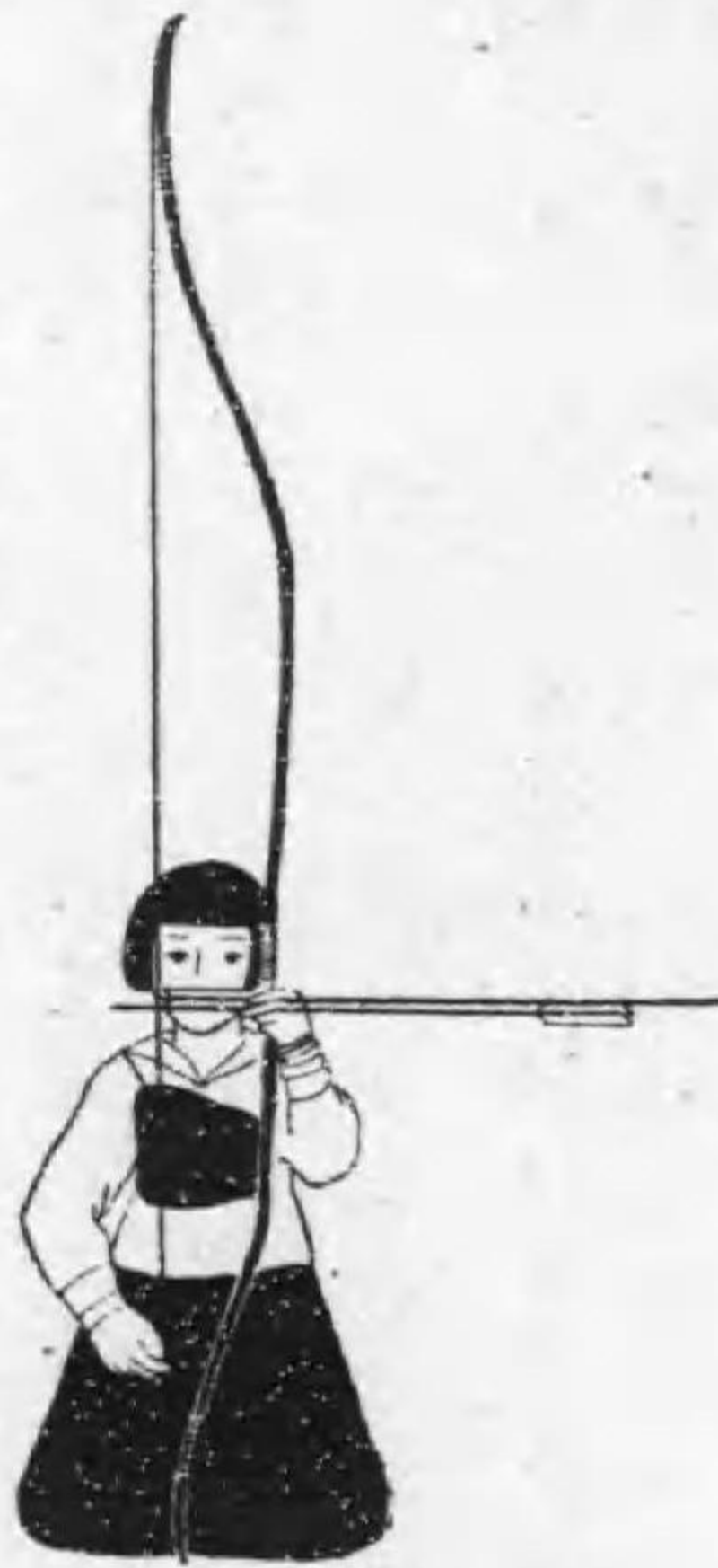
圖六十第 (ふ番を矢甲)

三四  
胴造をして、弓を左膝頭に當てて正面に持ち來り、顔を正しく左に向けて的を注視し、右手を離して軽くその拳を右脇腹附近に當

て、氣息を整へて後、靜かに顔を正面に復し、右手の甲を上にして拇指人差指、中指で乙矢の板付の邊を軽くつかみ、本矧が左手に觸れるまで靜かに右に引つばつて右手を離し、更に掌を上にして同じく三指で筈中の節の邊を持つて、第十九



圖七十第 (ふ番を矢甲)



圖八十第 (みすか)

圖の如く筈を右足の邊で床面に觸れしめ、靜かに正しくその板付を左方に向けて矢を倒す。而して右手を再び右脇腹に當て、的

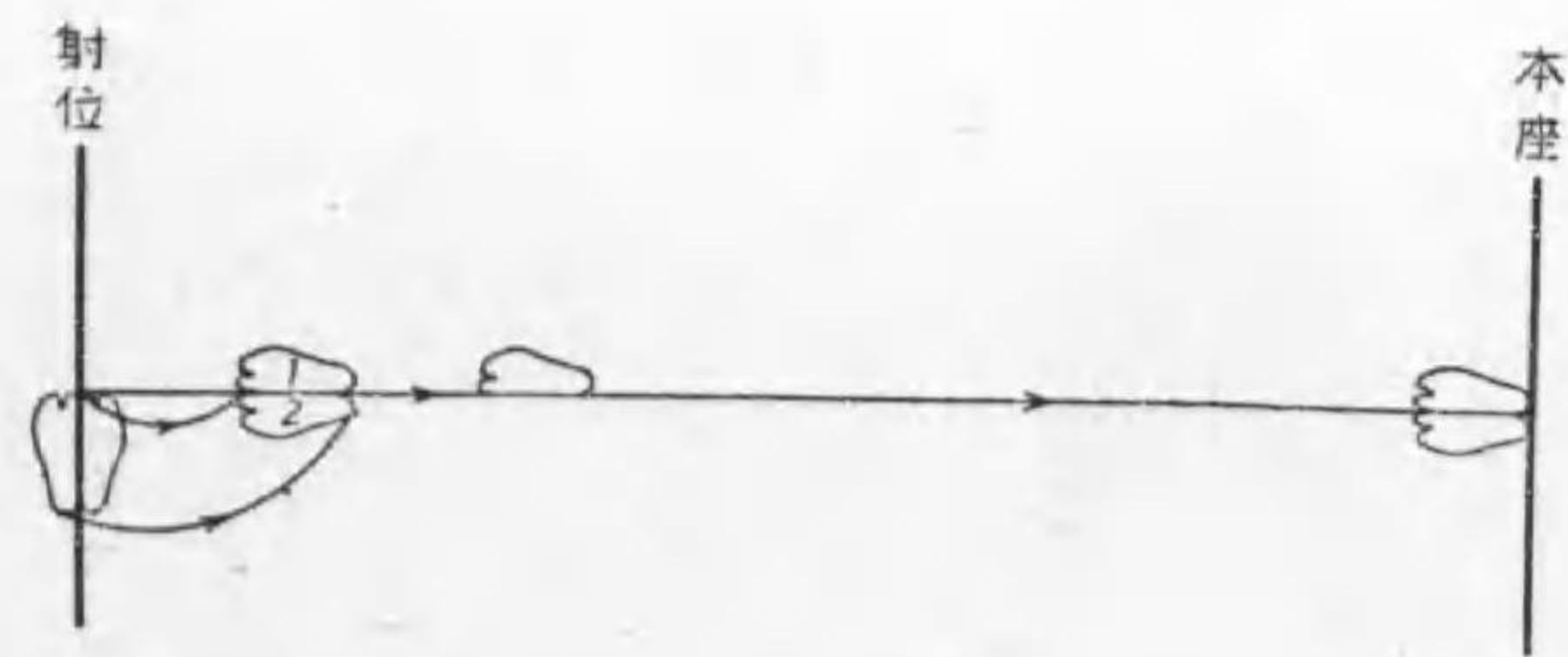
を注視しつつ氣息を整へて後、顔を正面に復し、靜かに取懸を爲し、法に従つて射終る。射終つたならば弓倒をなし、手腰の姿勢に復し、顔を正面に復し、右足より動作を起して兩足を揃へ、兩膝を揃



圖九十第 (す倒に面前を矢乙)

へて跪坐する。而して後右手で乙矢の筈をつかみ静かに引つばつて體の右後方に持ち來つて筈を離し、更にその板付をもつて乙矢をとりあげ、法の如く乙矢を番へて立ち上り、行射して後、手腰の姿勢に復し、第二十圖の如く、右足を少しく右に引きて左に向き、左足をそれに引きつけて的に面して立ち、右足より行動を起し、後退して本座で止まり、静かに一禮して射禮を終る。

上述の射禮は、最も簡單なものの一例であるが、もつと略式で行ふには、かすみ<sup>カスミ</sup>に打つことを止め、乙矢を直ちに、その板付を左にして



（る至に座本てし退後りよ位射）圖十二第

前面に置いて後、立ち上つて法の如く行射してもよい。

二人以上の團體で射禮をする時は、全部揃つて本座より射位に出で、すべて第一射手の動作に従つて行動する。第一射手が甲矢を射終つて跪坐したら、第二射手は静かに立ち上つて行射する。第三射手以下皆これにならつて行射する。全射手が甲矢を射終つたら、第一射手から順次乙矢を射る。第一射手以下、乙矢を射終つたら、弓倒をし、跪坐して全部射終るを待つ。最後の射手は、乙矢を射終つたら、直立したまま待つ。而して、第一射手以下、揃つて静かに立ち上り、全部の射手が揃つて左向して、揃つて後退する。

女子の弓道には、射禮は特に大切なものであるから、練習の際にも常に反復してこれを行ひ、坐作進退に慣れることが肝要である。



## 第四章 練習の方法

### 甲 一般の練習

#### 一 弓具の取扱ひ方

先づ最初に、弓に弦を張らなければならぬ。

弦の張つてない弓は、裏反うらぞりといつて外竹とだけを内側にして曲つてゐるものである。之を反對に曲げて弦を張るのである。

弦を張るには、まづ上の弦輪つるかをはめ、右手に下輪を持ち、弓の末弭うらばを弭いつばに當て、右手で下の關板せきいたをつかみ、左手で握皮にぎりかわのところを押へつけ、本弭もとばを左の大腿部にあてて、右手で下輪を本弭にはめる。

但し初心者には、はじめから自分で張らず、相當熟練した人に依頼し、

見學した後、自ら試みるやうにするがよい。何も知らずしてやたらに弦を張る時は、弓を破損する事もあり、又誤つて負傷することもあるから注意せねばならぬ。

次に弾ゆがけをはめる。初めに弾をかけてしまふと弦を張る事は困難である。但し押手おしで弾は初めからつけて居ても、弦を張るに差支へはない。

#### 二 素引すびき

素引といふのは、矢を番へずして射形の大體を練習をすることをいふ。試射する前に素引をして、筋骨などの工合を見、弓の調子を調べ、異常なきを見て初めて試射すべきである。殊に初心者は是非とも素引の練習をやらねばならぬ。素引は簡單なるのみならず、少しもこだはりが無いから、やすくと弓を引くことが出来るので、射形

の大要を會得するに便利である。索引ではば射形が出来てから、卷藁の練習を開始するやうにすると上達が早い。

索引では打起、引取、會などの練習をするばかりでなく、手の内、左手、兩肩、胸、右肘などの恰好の大體を會得することに努めねばならぬ。殊に射形の基礎ともいふべき左肩を落とすことは、索引をやつて十分會得しておかねばならぬ。索引をする時は、決して弦を離してはならぬ。矢をかけずして弦を離すと、弦で右耳や、右頬や、左腕を打つこともあるし、弦の切れることもある。

### 三 卷藁の練習法

先づ卷藁から弓丈位離れた所に立つて、足踏、胴造を行ふ。矢は卷藁矢を用ひる。正規の通り七道を行つて、卷藁中の一點を定め、これを的と思ひ、そこを正しく見て矢を放つべきである。卷藁である

から外れることはないなどと考へて、粗雑に行射してはならぬ。

卷藁の練習は中り外れがないから、初心者にとつては極めて面白くないものである。しかし中り外れといふことがないから、中てたといふ氣もなく、自然、精神に餘裕があるので、七道を行ふのにこだはりがない。そのため、十分姿勢を正すことが出来る。

索引の時と同じく、手の内、左手、左肩の落ち、右肘、右拳、左右の胸など、射形の基となる點をよく注意して、間違ひのない正しい射形を作るやうにせねばならぬ。

初心者の卷藁の練習には指導者が必要である。指導者は常に射手の前面に立つてゐて、巨細漏らすところなく、一々指導し、矯正せねばならぬ。又必要に應じて弦をとつて教へこまねばならぬ。

弦をとるといふことは、指導者が右手で射手の弓の握下を押へ、左

手で射手の躰の下のところの弦をとり、引取に際して、左右兩拳が空間を通る通路を、はつきりと知らしめ、會の氣持をも、よく會得させることをいふのである。細かいところを一々口で説明するよりも、弦をとつてやれば容易に射形の大體を會得させることが出来るものである。

卷藁の練習はひとり初心者のみならず、熟達の手にも亦必要である。常に的を射んとする直前には、卷藁にて數回試射し、心身を慣らすことが必要である。又射形がくづれた時には、それを正すために、卷藁に向ふべきである。或は新しい弦を張つた場合なども、數回卷藁にかけて弦を慣らさなければならぬ。

寒稽古の如きも、昔は卷藁のみの練習であつたさうだ。昔は弓の稽古に於ては、卷藁が最も重要視されたものだが、今では、卷藁は兎角

輕視せられ勝ちである。しかし本當に弓道をやらうといふ者は、是非とも卷藁の練習を十分に行はなければならぬ。

卷藁の練習は廣い場所を必要とせぬ。庭の隅でも、廊下でも、或は室内でもやれるから、雨天の時でも、酷寒の時でも練習することが出来るのは、何より便利である。寒い地方などで、戸外の運動の出来ぬ時節にも、卷藁の練習は出来る。

#### 四 的前の練習

大體、卷藁の練習に同じ。しかし的に向ふと中て、氣がさすものである。中て氣がさすとは、的に中てたいため射形のくづれることをいふので、特に離や殘身に於いてそれがよく現れるものである。指導者はこの點に注意し、初心者には中りは第二として、正しき射形を會得させることを第一として、教授すべきである。

初心者には、近距離で大きな的を射させる方がよろしい。最初は、七八間乃至十間位からはじめるのもよい。又尺五的、三尺的を使用するのもよい。やや射形を習得したら、十五間で大きな的を用ひるのがよい。

初心者は後から見ると矢が的につかぬものが多い。この原因は主として顔が十分左に向いてゐぬためか、又は左眼を使用するためである。指導者は常に習技者の後方から、矢の方向を見て、矢を正しく的に向はせる様にせねばならぬ。

### 乙 團體の練習

#### 一 道場の設備

二十名の人員を、一定の短時間に教育せんとするには、少くとも左

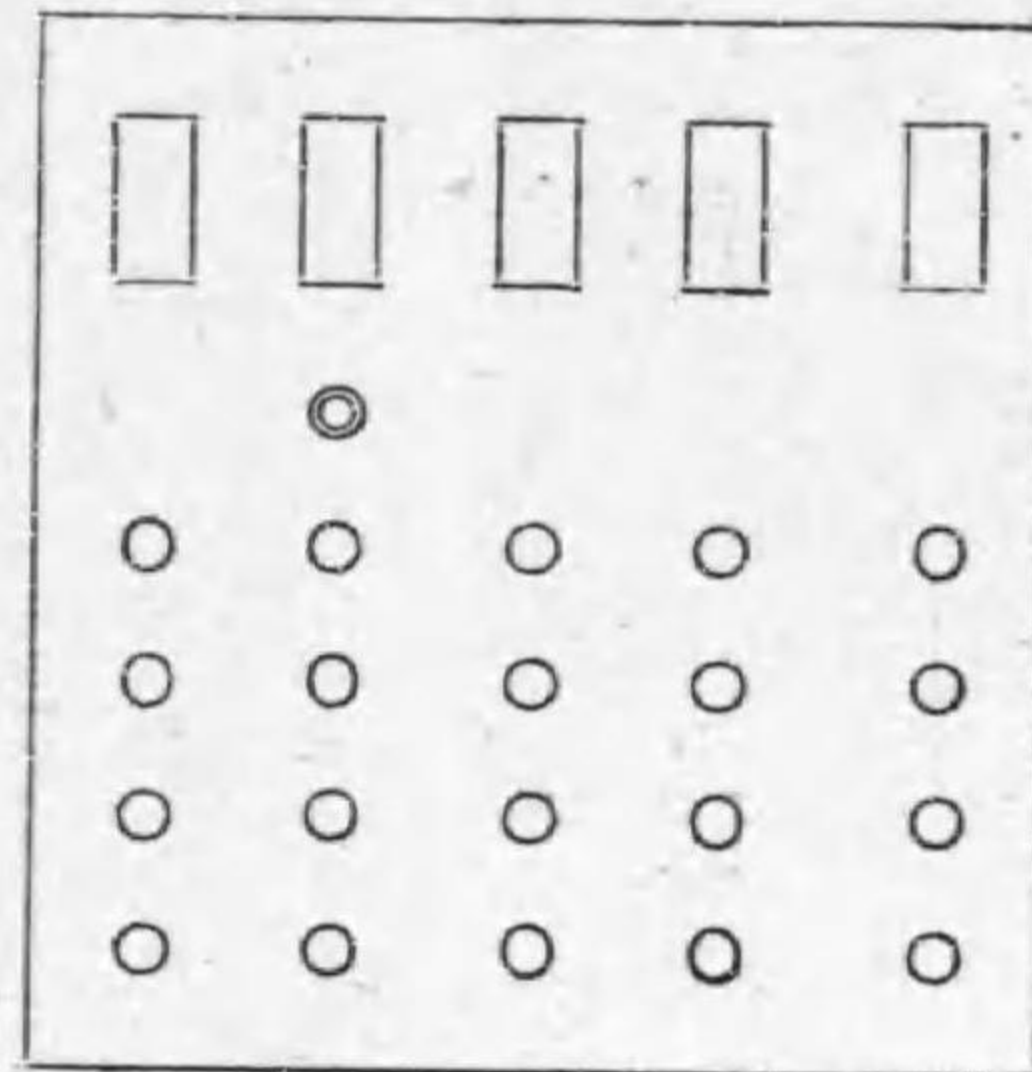
の設備を要する。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| (1) 道場の廣さ | 間口五間、奥行五間 |
| (2) 卷藁    | 五基        |
| (3) 卷藁矢   | 二十本       |
| (4) 弓     | 十張        |
| (5) 弾     | 二十組       |
| (6) 的矢    | 百本        |
| (7) 胸當    | 二十個       |

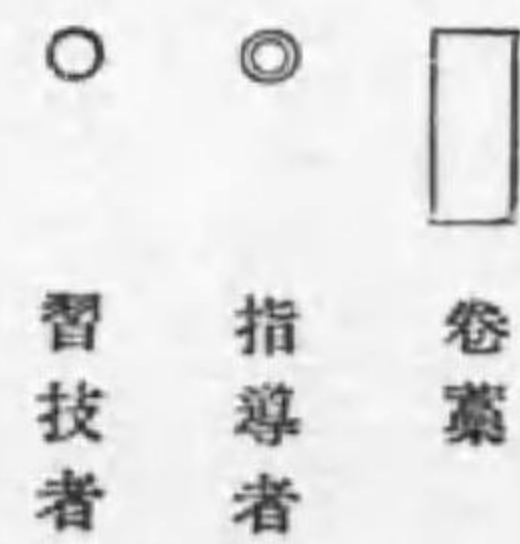
#### 二 隊形

先づ習技者を道場に入れて、所要の隊形に開くのである。道場の廣狹、人數の多少により、一列、二列、三列、四列等の横隊とする。間口五間、奥行五間の道場では行射の出来るのは先づ四間平方位であらう

から、二十名の習技者としては、四列の横隊が適當であらう。その隊形は大體左圖の通りである。



(形隊の習練) 圖一十二第



### 三 準備運動

先づ最初に、準備運動として、簡単な體操を行ふのがよい。準備運動を行はずして、直ちに行射させると、往々、身體の疼痛を起すやうな

事がある。準備運動は、これ等の故障を豫防するのみならず、よく氣分を引きしめ、精神を統一せしめる効果がある。

### 四 弓道體操

先づ「氣を付け」の號令をかけ、次に「用意」で、手腰の姿勢をとり、足を左右に開き、足踏、胴造の姿勢をとらせる。次に、「一」で弓構の姿勢をとらせ、「二」で打起の姿勢をとらせ、「三」で中力ちゅうりきの姿勢をとらせ、「四」で徐々に引



「け着を氣」 圖二十二第



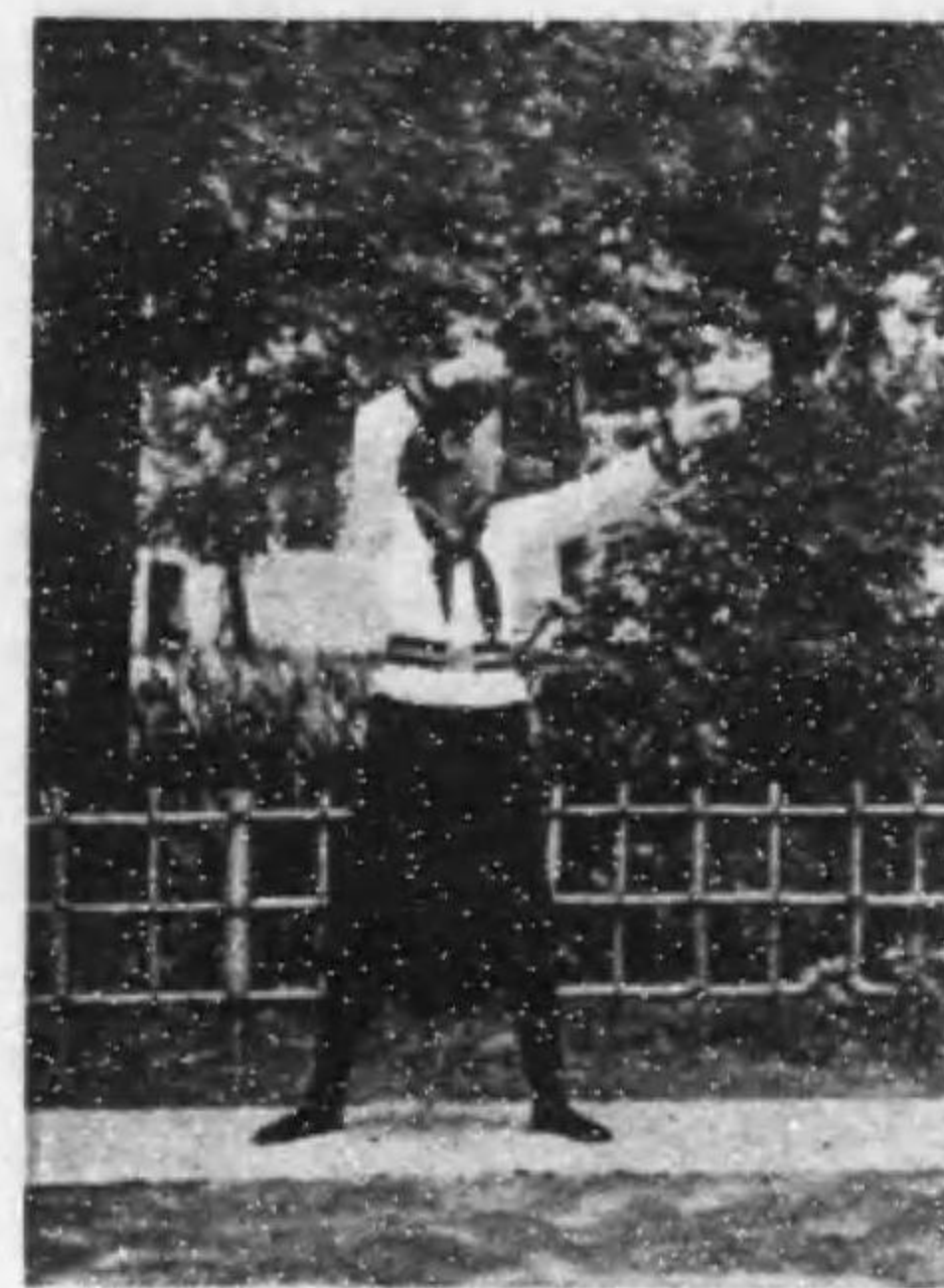
「用意」 圖三十二第



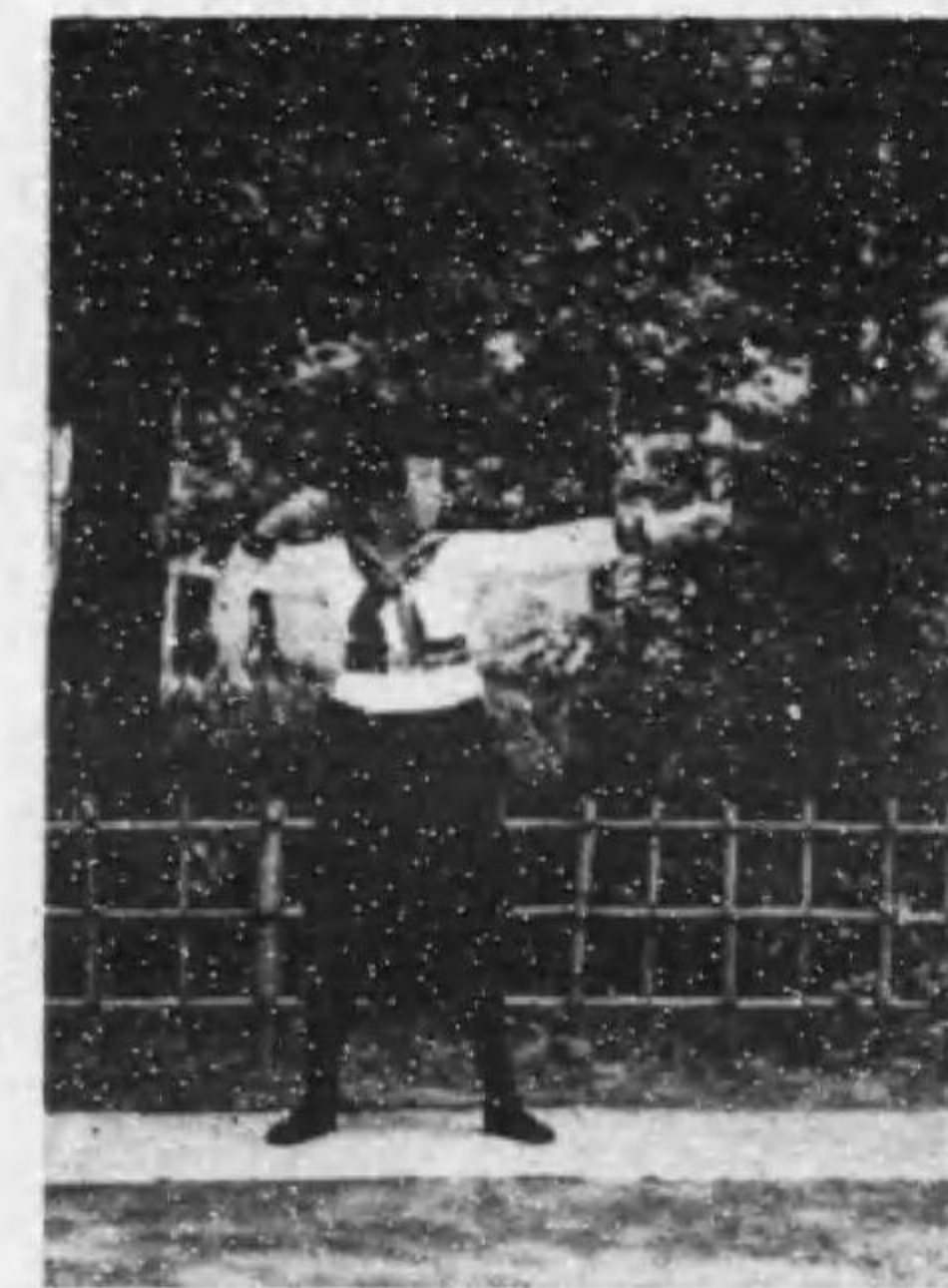
(構弓)「一」 圖四十二第



(起打)「二」 圖五十二第

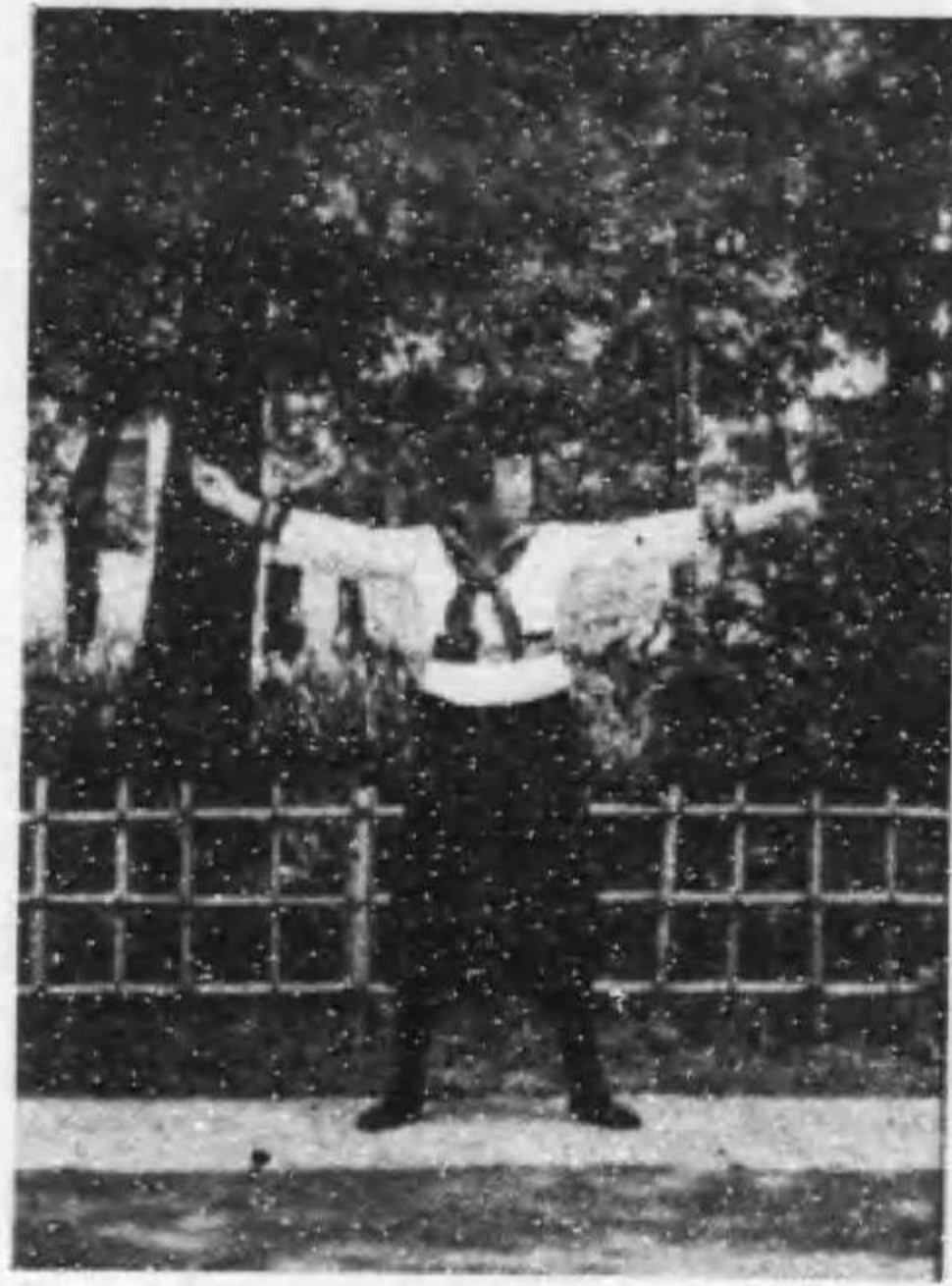


(力中)「三」 圖六十二第



(會)「四」 圖七十二第

取り、會の姿勢に入らしめ、「五」で離をなさしめ、「六」で手腰の姿勢に復歸せしめる。「一」より「六」までを繰返し行つて後、「なほれ」で右足、左足を元に復し、手を下ろさせる。



離「五」 圖八十二第



(腰手)「六」 圖九十二第

五 索引

磔をつけ、弓を持たせ、矢は持たせず、弓道體操と同様な姿勢をとらせる。但し離は行はしめず、適當に左右の手を縮めて後、弓倒の姿勢

に復さしめる。索引は弓道體操の場合の如く、「一」「二」「三」「四」で中力より會に入らしめ、「五」で左右の手を縮め、手腰の姿勢に復歸せしめる。

#### 六 卷藁の練習

四列の横隊ならば、先づ第一列のものを、氣を付け「で」で卷藁に正しく位置させ、「前へ」で卷藁に向つて前進させ、卷藁の前方、適當な處で止め、「右向け」で各習技者は左足を少しく前に踏出して右に向き、右足を左足に引付ける。次に指導者の號令で足踏、胴造の姿勢を取らせた後各自に矢を番へて卷藁を射させる。第二列は「氣を付け」で卷藁に正しく位置して不動の姿勢をとらせ、「交代」で第一列は一步前に出て、「右向き前へ」で第二列の居た位置に歸り、第二列は卷藁に直行して第一列の止つて居た位置に止る。第二列は第一列と同様の要領により卷藁の練習を行ふ。第三列、第四列は之に準ずる。

#### 七 的前の練習

第一列のものを、矢を一手持たせて本座に集め、「氣を付け」で習技者を正しく的に位置させた後、「前へ」で的に向ひ前進して射位に止まらせる。「右向け」の號令で習技者を右に正しく向はせた後、跪坐の姿勢をとらせ、一本の矢を番へて前より順次に的に射させるのである。他の一本の矢は「かすみ」に打たせてもよいし、又は板付を的に向け、體の前に正しく置かせてもよい。射終つた者は跪坐して、次の矢を番へて待つ。第一列の習技者が一手射終つたら、「氣を付け」で起立をして、「手腰」の姿勢を取らせる。第二列の者は矢を一手持つて本座で第一列の位置した所に立たせ、「交代」の號令で第一列、第二列は同時に卷藁で實施した要領で交代する。第三列、第四列はこれに準ずる。

#### 八 整理運動

整理運動として呼吸運動を行はしめる。運動の直後に呼吸運動を行ふことは、呼吸や血行を調整すると同時に胸廓を擴め、その可動性を増し、呼吸器を強健ならしめ、氣分を爽快にする。

### 丙 實施上の注意

- 一、弱い弓で練習させるがよい。弱い弓で行射すると筋骨に無理がないから、射形を會得することが容易であるし、射形を矯正することも亦容易である。
- 二、射形を會得させることを第一とし、中に重きを置いてはならない。初心者とはかく中てたがるものであるが、そのため射形を悪くすることが多い。正しい射形で行射すれば、自然中りも相當にあるものだから、正しい射形の會得を第一とせねばならぬ。

- 三、頬を打つたり、腕を打つたりするのは射形が正しくないからであるから、物見を正し、手の内を正してこれをなほさねばならぬ。頬や腕を打つと、おち氣がつくものだから、最初に正しい射形を教へて、頬や腕を打たせぬことが肝要である。
- 四、矢は射手の矢尺よりやや長い矢を引かせるのがよい。誤つて矢を引き込むと怪我をすることがあるから、決して短い矢を引かせぬやうにせねばならぬ。
- 五、割れた矢、折れた矢などは怪我の原因となることがあるから、決して使用させぬこと。
- 六、初心者練習には必ず指導者が必要である。初心者が單獨でやると種々の弊害がある。怪我でもさせると取返しがつかぬ。



## 第五章 弓道の競技

現今、弓道の競技は的中數で勝敗を定めるのが普通である。しかし、的中數のみで射手の優劣を定めることは、不合理であるから、品位や射形などを審査して採點し、的中數をも考慮して、射手の優劣を定め、競技の勝敗を定めるべしといふ論者も甚だ多い。しかし、遺憾なことには、品位や射形の審査といふことは、ある特殊な場合を除き、現今ではまだ實行が困難であらう。

### 一 競技の條件

#### (一) 距離

現今近的では手先十五間といふのが普通であるが、しかし多少の増減があつても差支へはなからう。

#### (二) 的の大きさ

尺二的を用ひるのが普通である。

#### (三) 的の高さ

尺二的では地上三寸の處に下縁したぶちが來るのがきまりである。しかし、地方の習慣などで種々なかけ方がある。

### 二 競技の形式

個人競技と團體競技との二種がある。

紅白試合は二組に分れ、各組から一人づつ出て個人試合をし、負け退のきにして最後に残つた方の組が勝となる。

團體競技には右の外、リーグ戦の形式によつて勝敗をきめる方法も採用されてゐるし、或は又トーナメント式でやつて居るものもある。

### 三 競技の方法

競技の方法は至極簡単である。各人所定の矢数だけ射て、總的  
數で勝敗をきめる。前述の紅白試合だけは例外である。

矢数が四本又は二本位の時は一度に全部射させる方法もあるが、  
矢数の多い時は二本宛又は四本宛射させ、一度休ませて後、次の順の  
廻り來る時再び射させるのがよい。

#### 四 決勝の方法

同中者のある時には、勝敗をきめる方法として「競射」をやらせる。  
個人競技の時の「競射」には通例次の二種がある。

(イ) 的の中心よりの距離によりて定めるもの

同中者各人につき一本宛を射させる。的の中心に最も近い矢  
を射た射手を優勝者とし、以下順次等級を定める。

ロ) 射詰「競射」

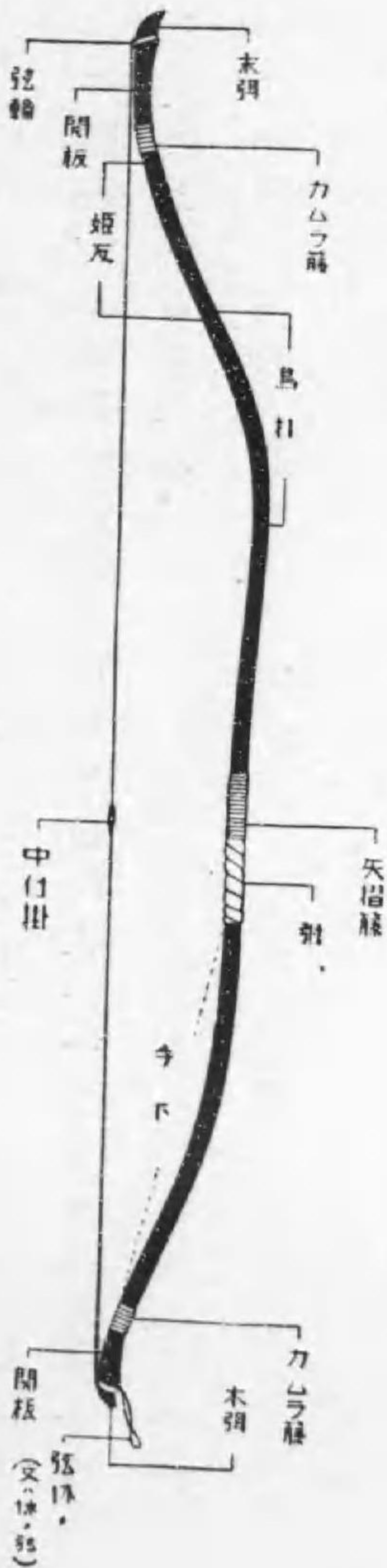
同中者を集め、まづ一本宛射させ、中らぬ者は除外して更に中つ  
た者のみ一本宛射させ、順次ふるひ落して最後の一人を優勝者  
とする。

團體競技の際、同中の場合の「競射」は各人が一本づゝ射て、その總中  
り數によつてきめる。

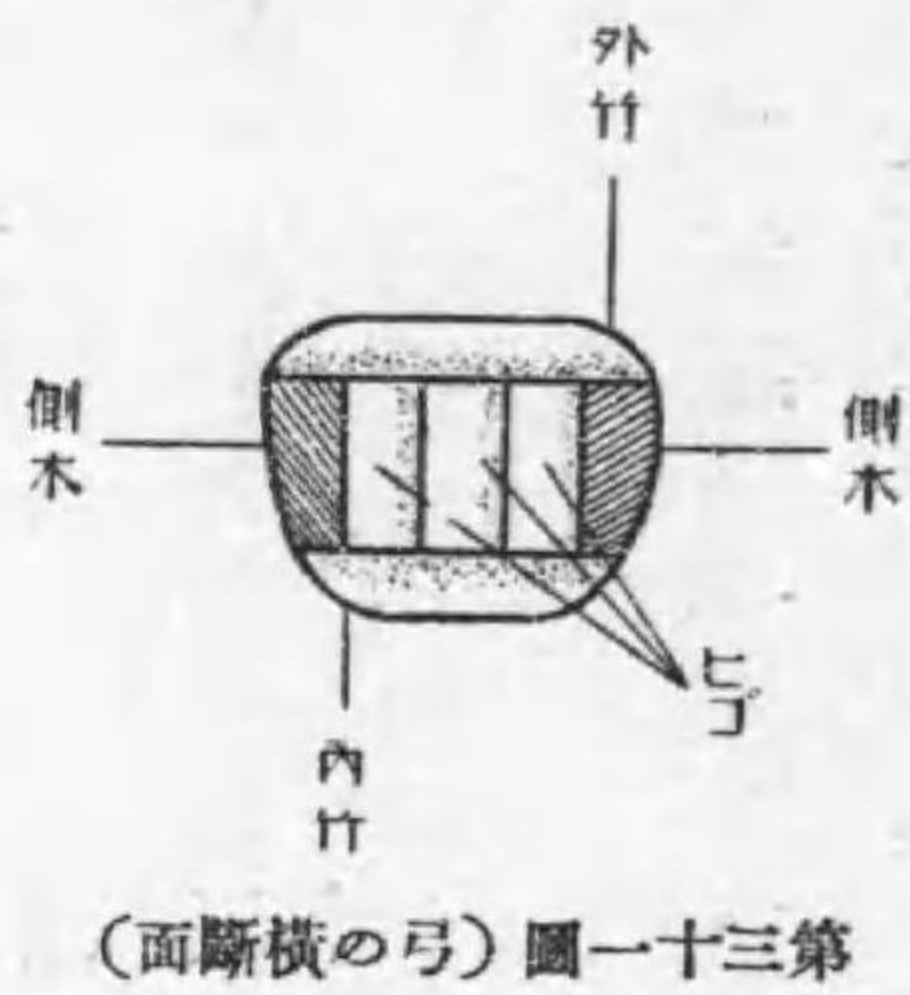
### 第六章 弓具及び服装

#### 一 弓

弓は木と竹とをいへで接合したものであつて、外見簡単なやうだ  
第三十圖(弓の名所)



が、實は中々複雑な構造を有するものである。第三十一圖は弓の構造を示したものである。これで見ると内竹外竹、兩側木、ひご等の有様は大



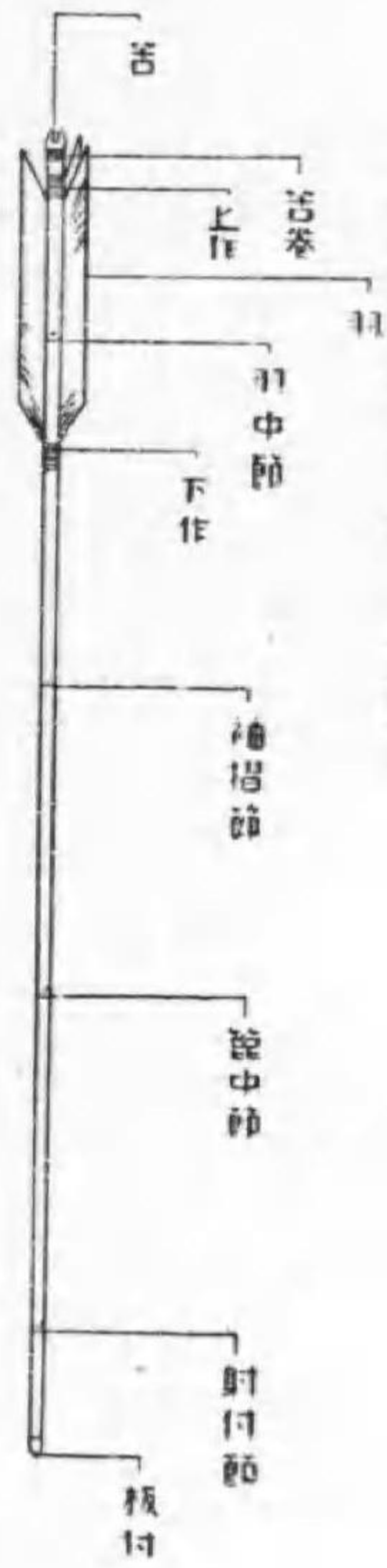
體了解が出来来るであらう。弓の長さは現今では七尺三寸が普通である。弓は前述の如くにいへを使用してゐるから、濕氣、殊に熱を伴つてゐる濕氣を嫌ふ。梅雨期及び二百十日前後などが弓には殊に禁物である。弓を保存するには乾燥した涼しい

處を擇ばなければならぬ。濕氣に當つた時には、乾いた清潔な布で濕氣を拭きとつてしまはなければならぬ。熱氣に當つた時、例へば炎天に放置されたやうな時は、直ぐに使用せず、暫く涼冷な場所に放置しておかなければならぬ。

#### 二 矢

矢の主要部は竹で作られてゐて、これを筥と呼んで居る。矢の各

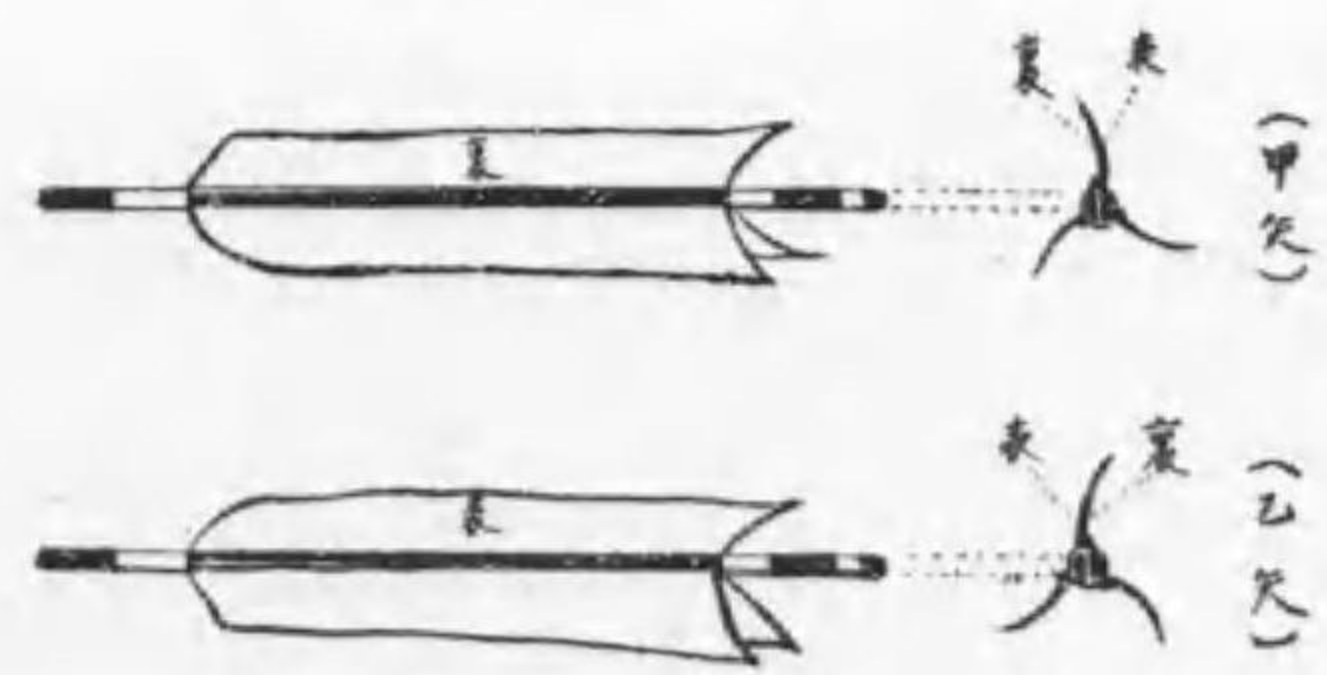
第三十二圖 (矢の名所)



部の名稱は第三十二圖を参照せられたい。筥はその形で一文字、麥粒、杉型などに分たれる。羽根は鷹又は鷹の尾羽根が最もよいものとされてゐる。模様は優美なもの、壯麗なものが上等なものとしてされてゐる。稽古矢には白鳥、七面鳥などの羽根が使用されてゐる。

矢は通例、一手といつて二本、又は四つ矢といつて二手即ち四本を揃へて作るものである。一手といふのは甲矢一本、乙矢一本のこと、

第三十三圖 (一手の矢)



四つ矢といふのは甲矢、乙矢二本づつのことである。甲矢と乙矢との區別は羽の裏表の向きによつてきまる。即ち矢を番へた時上部の羽(走り羽)の表が外向のもの、甲矢といひ、内向のものを乙矢といふ。(第三十三圖)。

矢筒は大抵細長い圓筒であつてながと、一閑張などで作つたものが多い。忍びら、やなぐひのやうなものは現在は使用せぬ。

三 碟

碟は鹿皮にて作り、三つ碟、四つ碟などの別がある。三つ碟といふのは、拇指、人差指、中指にはめるもの、四つ碟はこの外無名指にもはめるものをいふ。現在は四つ碟を用ひるのが普通である。

拇指にはまる所を帽子といつてゐる。帽子の内部に角又は木が入れてあるのを堅帽子といつてゐる。皮ばかりで出来たのは柔帽

子しと呼ばれる。初心のうちには柔帽子、三つ襍しを用ひる方が便利である。技術が進歩してから堅帽子を用ひる。

離はなれの強さや、牙はなれえはどうしても堅帽子でないと出ない。柔帽子では、指先、手首などに力がこつてしまつて、離の動作は弱くなり勝ちである。

襍はなめし皮で作つたものであるから水氣を嫌ふ。夏季には汗がつき易いものであるが、汗がついたら、日陰の風通しの好い處で静かに乾かし、決して直接、日光や火氣にあててはならぬ。襍には下したがけといつて木綿製の手袋様のものを使用するのがよい。これは襍の汚れを防ぎ、又汗を吸ひとる作用がある。

左手にも通例、押手掛おしでがけといふものを用ひる。これは手の痛まぬ豫防であるが、必ずしも必要なものではない。

#### 四 弦つる

弦は麻をよつて作つたものである。弦を弓に張る際には末弭すゑはの方の仕掛を自分で作らなければならぬが、これは初心者には少しむづかしいから経験のある人に作つて貰ひ、段々見習つて自分で作るやうにせねばならぬ。

弦を張つたら、中仕掛を作るのだが、これも初めは経験のある人に教へて貰つてから、段々自分で作るやうにすべきものである。

弦を張り中仕掛も出来たら、切れた弦で作つた草鞋様のもののでよくこすり、弦がけば、立たぬやうにせねばならぬ。使用の後も亦よくこすつて置く必要がある。

弱い弓に太い弦を使用すると調子が悪いものである。五分五厘乃至六分位の弓には二匁位の弦が適當であらう。

弦巻は多く籐又はあけびづるで作り、弦を巻きつけて持ち運ぶのに使用する。

### 五 くすね、ぎり粉

くすねは松脂に少し油をませ、軽く煮たもので、弦の麻を結合させるのに使ふ。夏季は油を少くし、冬季は油を多くして、氣候に適應させ、堅た過ぎず柔か過ぎぬやうにする必要がある。皮などに少量づつ包んで使用する。

ぎり粉は、磔の堅帽子の尖端に少し計りつけて、帽子が滑らぬやうにするものである。柔帽子にはぎり粉は使用せぬ。

### 六 巻藁

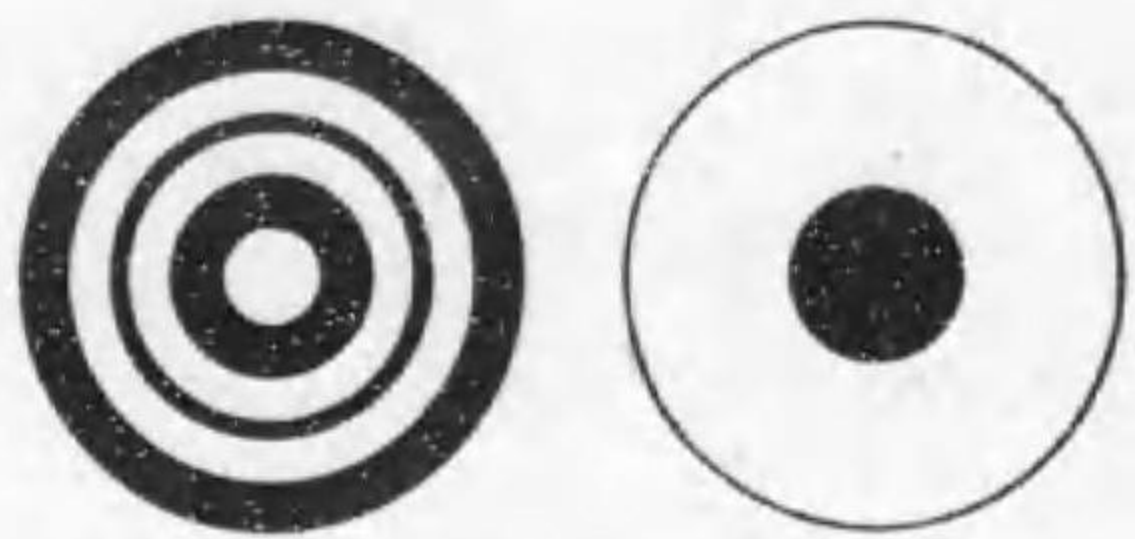
巻藁は藁を堅く巻き直径一尺五寸位、長さ二尺五寸位のものを作り、之を臺にのせ、肩の高さ位のところに置いたものである。セメン

ト樽などの中に藁を入れたものもある。

### 七 的

的は木の枠かまの片方に紙を張つたもので、通例その直径で大きさを表してゐる。尺二的、尺的、八寸的などいふのは各々その直径が一尺二寸、一尺、八寸などいふことである。

紙には中心に的の直径の三分の一位の直径を有する黒丸が附けてある。尺二的なら黒丸の直径は四寸である。



第三十四圖 (的)

禮射れいしゃ的てきといふのは第三十四圖の左圖の如く數本の同心圓を描いたものである。

稽古には普通、尺二的を用ひる。小さい的を用ひる時は、所謂あて

氣がさして、姿勢がくづれる恐れがあり勝ちだから、使用せぬ方がよ  
ろしい。又初心者には尺五的、二尺的で練習させてもよろしい。

金的といふのは金紙を張つた的で通例三寸以下の小的である。  
的をかけるには業串を用ひ、地上九寸位のところに的の中心が當  
るやうにかける。さうすれば尺二的なら地上三寸のところに下縁  
が來るわけである。

### 八 服 装

女子は乳を保護するため、胸當を使用するのがよい。胸當は通常、  
皮で作る。

和服の時は袴をつけ、襷をかけ(男子の如く左肌をぬがず)、更に胸當  
をするのがよい。

洋服の時は、胸當をするだけでよい。

弦が頭髮にさはる場合には鉢巻をするとよい。鉢巻はあまり目  
立たぬものがよい。

## 第七章 射場

塙<sup>あぢら</sup>さへあれば、校庭でもよろしい。又雨天體操場でやるのもよからう。しかし、板張でないとは禮射をするのには都合が悪い。學校で正課として弓道を課するには、五間間口位の建物が必要であらう。

射場には必ず神棚を設けるべきである。又、師範席、射手控席、弓具を入れる戸棚なども必要であらう。

弓を立てる場所も定めておく方が整頓に便利である。又弦張柱も定めて、初めから柱に「引つば」をつけるがよい。

射場と塙との中間に矢留を作るのもよろしい。これは一寸目障りであるけれども初心者の多い處では必要であらう。なほ塙の上に矢留をつけるのもよろしい。側方への外れ矢は概して少いが、こ

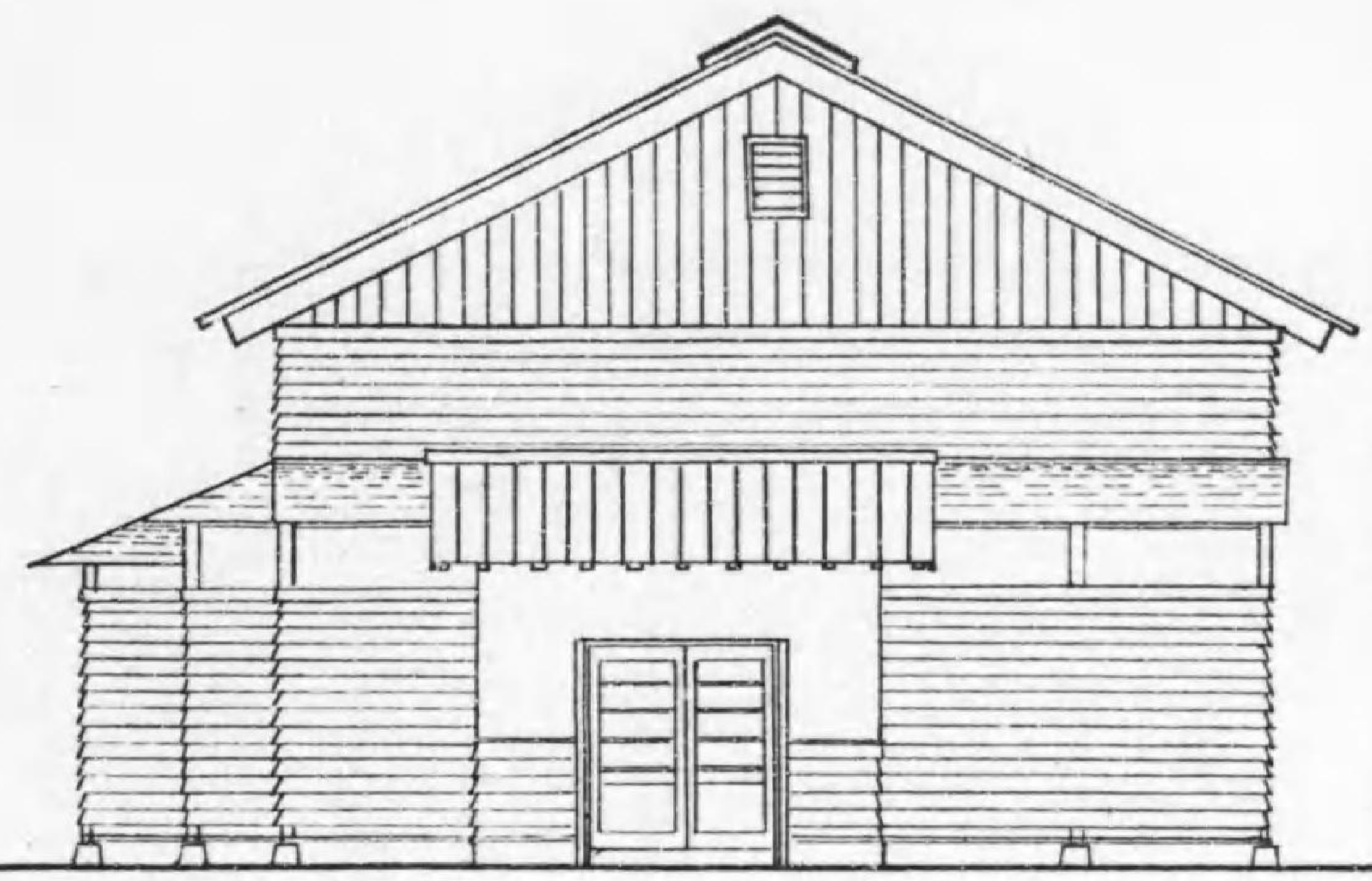
れに對しては要所に板圍をする位のことによからう。

塙の傍<sup>そば</sup>に矢取場を設ける必要もある。これは看的所<sup>かんてきじよ</sup>をも兼ねるものである。

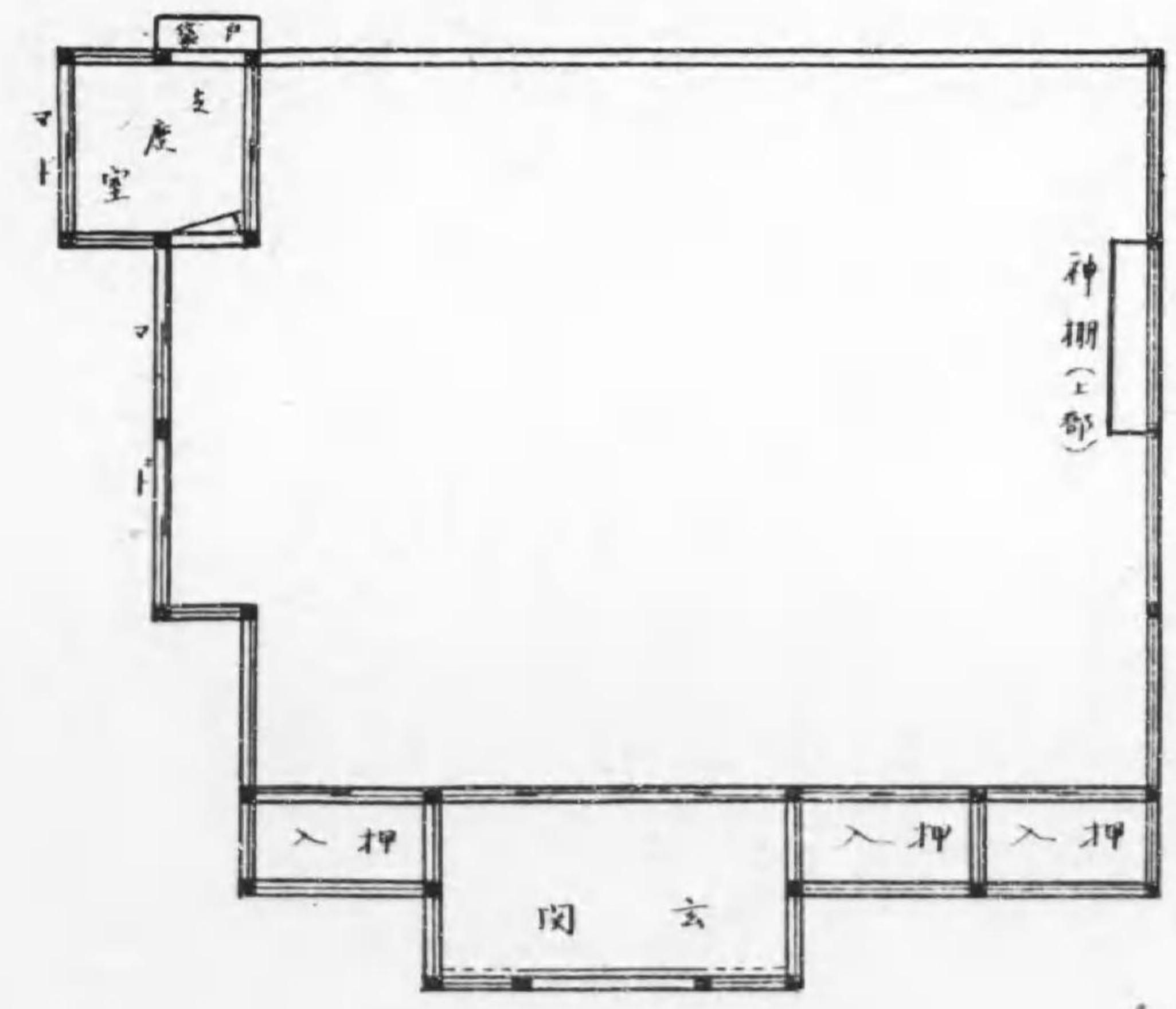
第三十五圖は東京女子高等師範學校附屬高等女學校の道場である。女學校の道場としては現今では最も完備したものであるから、参考の爲に掲げた。



正面圖



平面圖



昭和十三年七月十五日印刷  
昭和十三年七月二十日發行

・有所權著作・

——針指道弓子女——

著者 女子體育振興會

發行者 目 黑 甚 七

印刷者 白 井 赫 太 郎

定價金六拾錢

東京市神田區駿河臺三丁目一

發行所 目 黑 書 店

電話神田一〇五八・一〇五九  
振替口座東京二八〇九番



！にめたの設建の庭家と童兒な全健

宇都宮實踐女學校長 長澤末次郎 先著 「最新刊」

體 驗 から見た 子供の生活と家庭教育 四六判 價二・〇〇  
二六八頁 送一・一四

「家庭は最良の學校であり母は最良の教育者である」と言はれ「搖籃を動かす手は世界を動かす」とも言はれる。全く家庭は教育の源であり魂の育つ出發點でありゴ  
ールである。そこには父の力と共に更に母の力が輝いてゐる。かゝる例は歴史の事  
實に徴すまでもなく日常の生活に於て吾人の餘りに屢々経験する處で、今次事變の  
華たる山内大尉の立派な武勳の後に欽仰すべき母堂の在りし事は其の最たる例であ  
る。本書はかゝる意味に於て人の子の母たり父たるものの必讀すべき寶典である。

島根縣 河上民祐 先著 「最新刊」

教師と 母への 兒童の安全教育 四六判 價二・三〇  
二九〇頁 送一・一四

殆ど毎日の如く新聞紙上に報道される兒童・學童の悲惨な災禍に心痛めた著者が遂  
に黙視するに忍びず、さうした悲惨事を絶滅すべく決心して筆を執り兒童を持つ母  
親の方々に又兒童の保導に重責ある世の教育者諸賢に訴へたものが本書であつて、  
兒童の家庭・學校に於ける日常生活から運動遠足及び震火災其の他の非常時に於け  
る兒童保育上の危険とその對策を四篇二十一章に互つて詳細に説く。熟讀玩味、是  
非一書を座右に備へられよ。

東京市神田區 駿河臺一ノ三 目黒書店 振替 〇八 東京 九

終

